

商業用店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

白枝荒神遺跡

2018年

出雲市教育委員会

商業用店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

白枝荒神遺跡

2018年

出雲市教育委員会

序

白枝荒神遺跡は、出雲平野の中央部付近、出雲市白枝町・天神町・渡橋町にまたがって所在する、弥生時代を中心とした集落遺跡として知られています。

本書は、株式会社丸信商事から依頼を受けて、2017（平成29）年度に実施した、商業用店舗新築工事に伴う白枝荒神遺跡の発掘調査報告書です。

今回の調査では、弥生時代の人々の生活跡とともに弥生時代前期から古墳時代前期にかけての遺物が出土しました。特に、内行花文鏡やガラス小玉の発見は、出雲平野の歴史を考える上でも重要な成果となりました。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や、関係者の皆様に厚くお礼申しあげます。

2018（平成30）年12月

出雲市教育委員会

教育長 横野 信幸

例　言

1. 本書は、2017(平成 29)年度に出雲市教育委員会が実施した、商業用店舗新築工事に伴う白枝荒神遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 調査は下記の体制、期間で実施した。

調査地及び調査面積 島根県出雲市白枝町 962 ほか 約 335m²

調査期間 2017(平成 29)年 7月 19 日～9月 26 日（現地調査）

調査体制 <2017(平成 29)年度> 現地調査・報告書作成

事務局 佐藤隆夫（出雲市市民文化部 文化財課課長）

宍道年弘（同 文化財課課長補佐兼埋蔵文化財 1係係長）

調査員 須賀照隆（同 文化財課主任）

調査補助員 加藤章三（同 文化財課臨時職員）

整理作業員 前島浩子

発掘作業員 伊藤伸、伊藤貴俊、井上栄、江角和樹、金森光雄、川上晴夫、佐野静枝、

周藤俊也、高根常代、高根豊、多久野明雄、田邊宏行、花田増男、

渡部和憲

<2018(平成 30)年度> 報告書作成

事務局 木村亨（出雲市市民文化部 次長兼文化財課課長）

景山真二（同 文化財課課長補佐兼埋蔵文化財 1係係長）

調査員 須賀照隆（同 文化財課主任）

整理作業員 荒木恵理子

3. 報告書作成にあたって、南健太郎（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教）から玉稿を賜った。

4. 本書は、第 4 章第 4 節を南健太郎、その他を須賀が執筆した。全体の編集は、須賀が行った。

5. 本書に掲載した出土品の実測は、須賀及び加藤が行った。

6. 本書に掲載した写真は、須賀が撮影し、一部（図版 14）を坂本豊治（出雲市文化財課主任）が撮影した。

7. 本書に掲載した遺物及び実測図、写真は出雲市文化財課が保管している。

8. 出土品のうち、金属製品は株式会社吉田生物研究所に保存処理を委託した。

9. 調査・整理にあたっては、以下の方々から指導、助言を得た。記して感謝申しあげます（敬称略）。

岩本崇（島根大学准教授）、岡村秀典（京都大学教授）、勝部智明（島根県教育庁文化財課主幹）、

田村朋美（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター研究員）、松本岩雄（八雲立つ風土記の丘所長）、

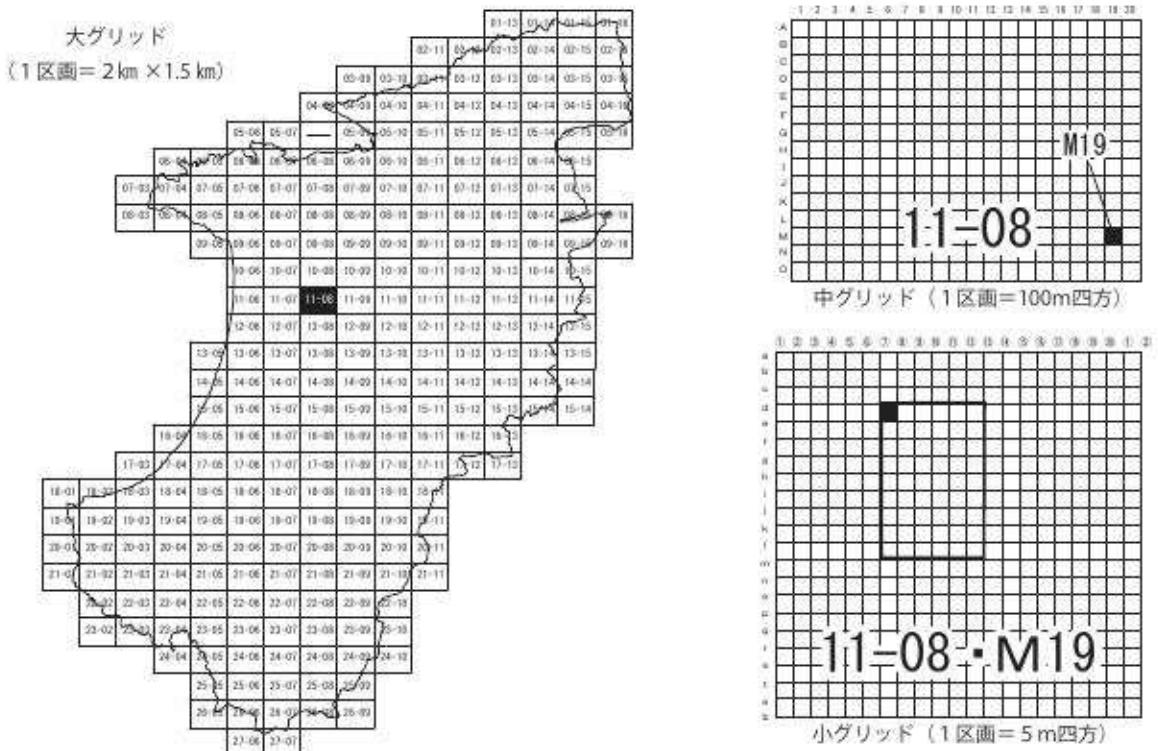
渡邊貞幸（出雲弥生の森博物館名誉館長）

10. 本書で使用した方位は、座標北を示す。座標は、世界測地系第Ⅲ系に基づくものである。標高は海拔高を示す。

11. 本書では、世界測地系第Ⅲ系および出雲市都市計画図に基づいて作成した出雲市グリッドを使用し、遺構等の位置を示す。

12. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SD—溝 SK—土坑 SP—ピット



本文目次

| | |
|--------------------|----|
| 第1章 調査に至る経緯と経過 | 1 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | 2 |
| 第1節 地理的環境 | 2 |
| 第2節 歴史的環境 | 2 |
| 第3節 白枝荒神遺跡と周辺の弥生集落 | 4 |
| 第3章 調査の成果 | 5 |
| 第1節 調査の概要 | 5 |
| 第2節 遺構 | 7 |
| 第3節 遺物 | 13 |
| 第4章 総括 | 26 |
| 第1節 遺跡の規模と立地 | 26 |
| 第2節 各期における遺跡の様相 | 26 |
| 第3節 出雲地方周辺の漢鏡 | 27 |
| 第4節 破鏡からみた白枝荒神遺跡 | 32 |
| 第5章 結語 | 38 |

挿図目次

| | | | |
|----------------------|----|--------------------------|----|
| 第1図 事業地と試掘トレンチ等位置図 | 1 | 第16図 遺構外出土土器実測図2 | 21 |
| 第2図 出雲平野の主要遺跡 | 3 | 第17図 遺構外出土土器実測図3 | 22 |
| 第3図 白枝荒神遺跡周辺の弥生遺跡 | 4 | 第18図 遺構外出土土器実測図4 | 23 |
| 第4図 遺構配置図 | 6 | 第19図 遺構外出土石製品実測図 | 24 |
| 第5図 調査区土層図 | 7 | 第20図 遺構外出土破鏡・ガラス小玉実測図 | 24 |
| 第6図 遺構実測図1 | 8 | 第21図 破鏡復元想定図 | 24 |
| 第7図 遺構実測図2 | 11 | 第22図 破鏡・ガラス小玉出土位置図 | 25 |
| 第8図 遺構実測図3 | 12 | 第23図 白枝荒神遺跡・小畠遺跡の調査地配置図 | 26 |
| 第9図 SD 1・2出土遺物実測図 | 14 | 第24図 石見地方～伯耆地方西部出土の漢鏡分布図 | 28 |
| 第10図 SD 5出土遺物実測図 | 15 | 第25図 島根県出土の漢鏡 | 29 |
| 第11図 SD 5・6・9出土遺物実測図 | 16 | 第26図 破鏡の分割から廃棄に至るプロセス | 32 |
| 第12図 SK 1・2・4出土遺物実測図 | 17 | 第27図 白枝荒神遺跡出土破鏡の破断面 | 33 |
| 第13図 SK 5出土遺物実測図1 | 18 | 第28図 鳥取県地域出土破鏡の諸例 | 34 |
| 第14図 SK 5出土遺物実測図2 | 19 | 第29図 古備地城出土破鏡 | 35 |
| 第15図 遺構外出土土器実測図1 | 20 | 第30図 四国地域出土破鏡 | 35 |

挿表目次

| | |
|-------------------------|----|
| 第1表 石見地方～伯耆地方西部の出土漢鏡一覧表 | 28 |
|-------------------------|----|

写真図版目次

| | | | |
|------|----------------|-------|-----------------------------------|
| 図版 1 | 調査区全景 | 図版 7 | SD 4 |
| 図版 2 | 破鏡 | | SD 7・8 |
| | ガラス小玉 | | SK 1 |
| | | | SK 4 |
| 図版 3 | 調査区北区 | | SK 6 |
| | 調査区南区 | | SK 7 |
| 図版 4 | SD 1・2・5 | | SK 8 |
| | SD 1・2 | | SK 9 |
| 図版 5 | SD 5 | 図版 8 | SK 5出土土器 |
| | SD 9 | 図版 9 | SD 1・2・5出土土器 |
| | SD 6 | 図版 10 | SD 6・9, SK 1・2・4出土土器 遺構外出土土器 1 |
| | SD 6・SK 3土層 | 図版 11 | 遺構外出土土器 2 |
| 図版 6 | SK 5 | 図版 12 | 遺構外出土土器 3 |
| | SK 2 | 図版 13 | 遺構外出土土器 4 |
| | SK 2 ガラス小玉出土状況 | | 石製品 |
| | | 図版 14 | SK 5出土削石 |

第1章 調査に至る経緯と経過

2015（平成27）年2月、出雲市白枝町地内の商業用店舗新築計画に伴い、事業主体である株式会社丸信商事から、埋蔵文化財確認調査の依頼があった。計画地が、周知の埋蔵文化財包蔵地「白枝荒神遺跡」と「小畠遺跡」の隣接地であり、事業予定地内にも遺跡が続いている可能性があると判断し、同年3月と5月、出雲市文化財課において重機によるトレンチ調査を実施した。その結果、6箇所のトレンチで遺跡の存在を確認し、白枝荒神遺跡と小畠遺跡が連続した一体的な遺跡であることが判明した。遺跡は白枝荒神遺跡として取り扱うこととし、その後、事業者と出雲市文化財課で協議を重ね、2017（平成29）年7月から本発掘調査を実施した。

発掘調査は、事業面積約13,000m²のうち、遺跡への影響の大きい地下調整池部分約300m²と浄化槽部分約35m²を対象とし、2017（平成29）年7月19日～同年9月26日の期間で実施した。調査後に島根県教育委員会との協議を行った結果、事業計画の変更が困難であることから、遺跡を記録保存に留めることはやむを得ないと判断に至った。



第1図 事業地と試掘トレンチ等位置図
(●遺跡あり ○遺跡なし 破線は遺跡推定範囲)

- <白枝荒神遺跡の発掘調査に関する主な文化財保護法上の文書>※全て2017（平成29）年
- 3月13日 「埋蔵文化財発掘の通知について」事業者から市教委経由で県教委へ
 - 3月13日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委から市教委経由で事業者へ
 - 6月28日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
 - 9月29日 「（仮）マンモス出雲店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
 - 9月29日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委から市教委へ
 - 9月29日 「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ
 - 9月29日 「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ
 - 10月12日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」県教委から市教委へ

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

白枝荒神遺跡は出雲市白枝町・天神町・渡橋町にまたがって所在する。JR 出雲市駅の北西約 2 km, 出雲平野のほぼ中央部に位置している。出雲平野は、南北を中国山地と島根半島に、東西を宍道湖と日本海沿岸部の砂丘に囲まれた、東西約 20km, 南北約 5 km にわたる県内最大の沖積平野である。平野を形成した二大河川、斐伊川が宍道湖に、神戸川が日本海に注いでいる。

なお、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』の神門郡条によると、かつての出雲平野西部には斐伊川や神戸川が注ぐ大きな潟湖（神門水海）があり、現在とは大きく異なる景観が広がっていた。このような景観は弥生時代にはすでに形成されていたと考えられ、弥生時代における白枝荒神遺跡の立地は、この潟湖の東汀線付近にあたるものと推定される。

第2節 歴史的環境

1 繩文時代

出雲平野における確実な遺跡の初現は、海進期にあたる縄文時代早期である。平野北部の山麓に所在する山持遺跡（10）、菱根遺跡（5）や平野西端の砂丘上に位置する上長浜貝塚（6）などが知られている。中期までは山麓付近に数例の遺跡が確認されるのみである。その後、海退が進んだ後晩期になると遺跡数が増加する。出雲大社境内遺跡（2）や三田谷 I 遺跡（34）、後谷遺跡（52）などの山麓付近を中心とした遺跡のほか、矢野遺跡（17）、蔵小路西遺跡（20）、壱丁田遺跡（15）など、平野中央部においても遺跡が確認されるようになった。

2 弥生時代

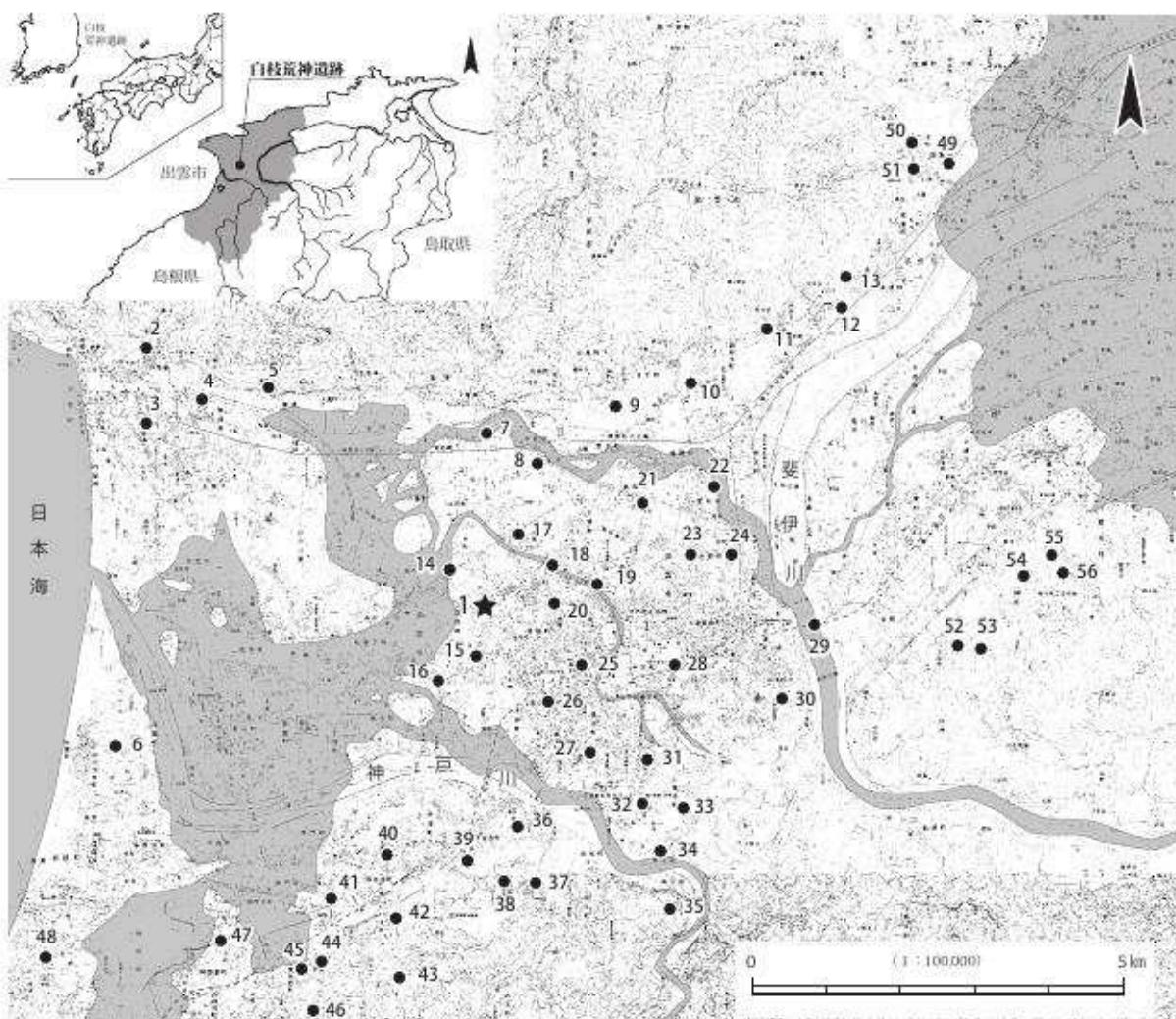
弥生時代になると平野部の集落が大きく発達する。縄文時代から継続して発展した矢野遺跡などのほか、中期から後期にかけて急速に発達した白枝荒神遺跡（1）、古志本郷遺跡（36）、天神遺跡（26）、中野清水遺跡（24）、青木遺跡（12）など、大規模な集落が平野部各所で展開するようになった。当該期には、吉備や九州、朝鮮半島などとの交流を示す出土品がこれらの大規模集落を中心に確認されており、各地との活発な交流があったことがわかる。

その他、特筆すべき遺跡として、後期後葉以降の「王墓」である巨大な四隅突出型墳丘墓が築かれた斐伊川左岸丘陵上の西谷墳墓群（30）などがあげられる。西谷墳墓群において最初に築かれた王墓・西谷 3 号墓では、葬祭土器や副葬品に吉備や北陸系、大陸由来の出土品も確認されており、当時の支配者層の交流範囲の広さがうかがえる。

3 古墳時代

古墳時代に入ると、弥生時代から継続して営まれた平野部の集落は、中期までに急激な衰退をみせる。中・後期に継続する集落も存在するが、弥生時代のような大規模な集落の存在は明確でない。一方、平野南側の山麓部においては、三田谷I遺跡や九景川遺跡（45）など、中期から後期にかけて拡大をみせる集落が確認される。

古墳については、前期末の大寺1号墳（13）、山地古墳（47）、中期から後期初頭の北光寺古墳（46）



1. 白枝荒神遺跡・小畠遺跡
2. 出雲大社境内遺跡
3. 鹿藏山遺跡
4. 原山遺跡
5. 蓼根遺跡
6. 上長浜貝塚
7. 高浜川遺跡
8. 高浜I遺跡
9. 里方本郷遺跡
10. 山持遺跡
11. 門前遺跡
12. 青木遺跡
13. 大寺1号墳
14. 井原遺跡
15. 壱丁田遺跡
16. 白枝本郷遺跡・余小路遺跡
17. 矢野遺跡
18. 小山遺跡
19. 姫原西遺跡
20. 蔵小路西遺跡
21. 高岡II遺跡
22. 荻野II遺跡
23. 中野西遺跡・中野美保遺跡
24. 中野清水遺跡
25. 海上遺跡
26. 天神遺跡
27. 神門寺付近遺跡
28. 今市大念寺古墳
29. 斐伊川鉄橋遺跡
30. 西谷墳墓群
31. 上塩冶築山古墳・築山遺跡
32. 上塩冶地藏山古墳
33. 上塩冶横穴墓群
34. 三田谷I遺跡
35. 小坂古墳・刈山古墳群
36. 古志本郷遺跡・下古志遺跡
37. 放レ山古墳
38. 妙蓮寺山古墳
39. 宝塚古墳
40. 知井宮多聞院遺跡・東原遺跡
41. 神門横穴墓群
42. 浅柄遺跡
43. 保知石遺跡
44. 御崎谷遺跡
45. 九景川遺跡
46. 北光寺古墳
47. 山地古墳
48. 板津焼山遺跡
49. 源代遺跡
50. 国富中村古墳
51. 上島古墳
52. 後谷遺跡
53. 小野遺跡
54. 上ヶ谷遺跡
55. 杉沢遺跡・杉沢II遺跡
56. 三井II遺跡

第2図 出雲平野の主要遺跡 ※網掛けは弥生時代の推定水域

などが知られるが、確認される築造数は少ない。その後、後期後半以降は神戸川右岸に今市大念寺古墳（28）、上塩治築山古墳（31）など、出雲西部最大級の古墳が次々と築造され、古墳の築造数も急速に増加する。この頃には横穴墓も盛んに造られ、神戸川右岸の上塩治横穴墓群（33）、左岸の神門横穴墓群（41）など大規模な横穴墓群が形成された。

第3節 白枝荒神遺跡と周辺の弥生集落

白枝荒神遺跡は1993～1996（平成5～8）年度、2000（平成12）年度に遺跡北端付近において発掘調査が実施されており（各調査地点は第1章参照）、弥生時代から古墳時代前期にかけての土坑・溝・土器群などが確認されている集落遺跡である。サメの絵画土器・分銅型土製品、吉備の特殊土器、北部九州系土器、西部瀬戸内系土器など特殊な遺物も出土している。

周辺には弥生時代の遺跡が点在しており、これらの遺跡は当時の潟湖東汀線付近に立地した集落群と考えられている（第3図）。小畠遺跡では白枝荒神遺跡と同様の時期の遺構・遺物が確認されており、同一集落となるものと思われる。壱町田遺跡では縄文時代後期前半の土器も出土しており、この時期に周囲がすでに陸地化し、人々の生活が始まっていたことがわかる。

なお、白枝荒神遺跡・小畠遺跡以外の周辺の遺跡群は全て最盛期が古墳時代以降に求められる集落遺跡であり、弥生時代においては白枝荒神遺跡の優位性が顕著である。出土遺物の特殊性等からみても、弥生時代において白枝荒神遺跡は周辺の遺跡群の中で中核をなす集落であったものと考えられる。



第3図 白枝荒神遺跡周辺の弥生遺跡

参考文献

- 出雲市教育委員会 1997『遺跡が語る古代の出雲』
- 出雲市教育委員会 1998『白枝荒神遺跡』市道松寄下小山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 出雲市教育委員会 2002『白枝荒神遺跡 井原遺跡』白枝地区ふるさと農道整備事業に伴う発掘調査報告書
- 出雲市教育委員会 2008『壱町田遺跡（2次調査）』都市計画道路「出雲市駅前白枝線」街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市の文化財報告3
- 島根県教育委員会 2007『余小路遺跡・小畠遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8
- 高橋周 2011『弥生時代の出雲平野における水域復元』『出雲弥生の森博物館研究紀要』第1集 出雲弥生の森博物館 1～

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

1 調査方法の概要（第4図）

工事予定範囲のうち、遺跡への影響が大きい地下調整池部分約300m²（北区）、浄化槽工事部分約35m²（南区）を対象に発掘調査を実施した。調査は、重機により表土を掘削した後、手掘りによって徐々に掘り下げ、層位的に遺構・遺物の検出を行った。

また、遺構・遺物の位置については、世界測地系第III系座標および出雲市都市計画図に基づいて作成した出雲市グリッド（例言参照）を基準として調査を進めた。以下、本書ではグリッド名称は小グリッド名のみを表記する。

2 土層堆積状況（第5図）

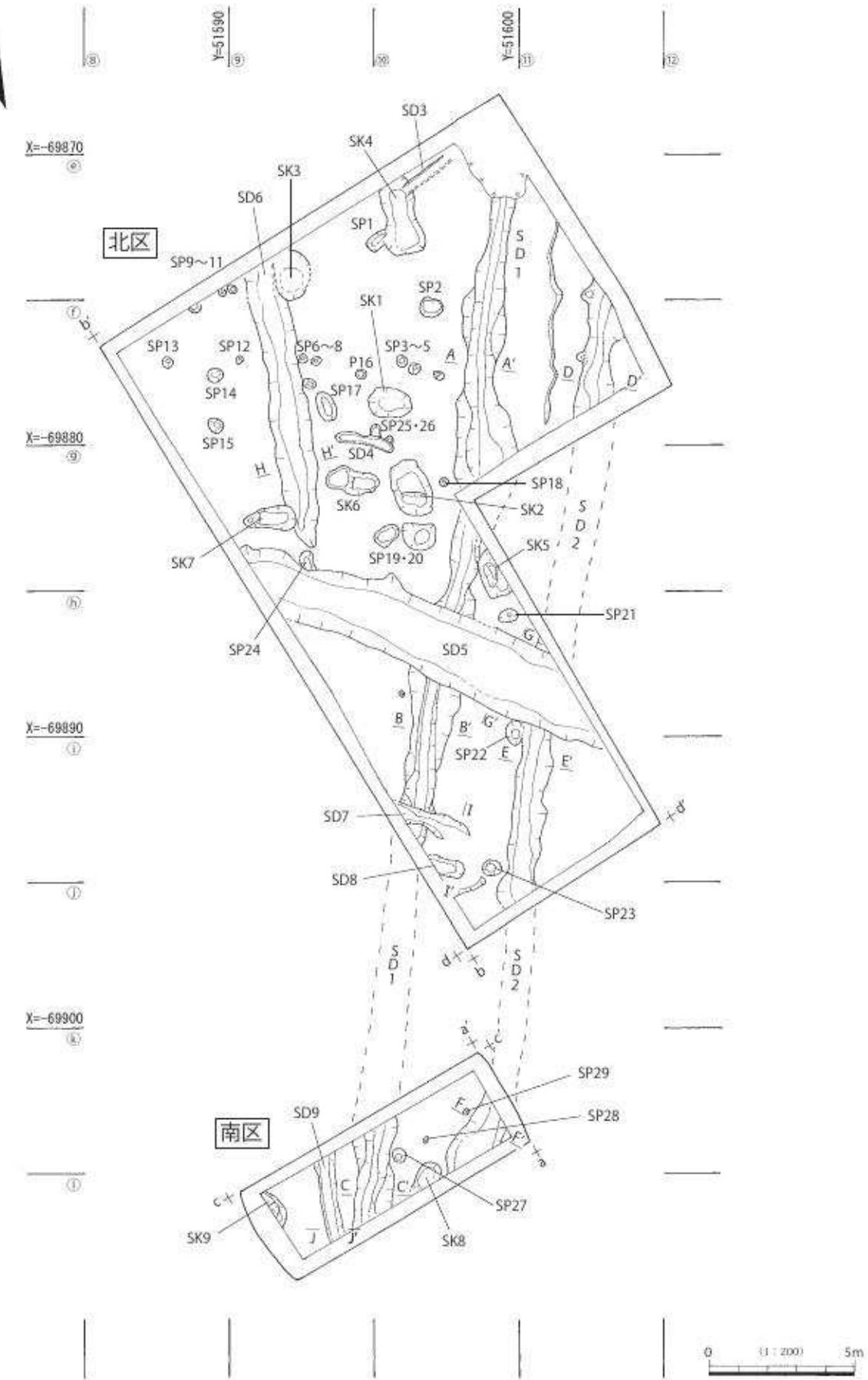
基本的な層序は、上からⅠ層：耕作土等、Ⅱ層：黒褐色粘土（遺物包含層上層）、Ⅲ層：灰黄褐色粘質土（遺物包含層下層）、Ⅳ層：灰黄褐色シルト等（遺構基盤層）の順に堆積している。Ⅰ～Ⅲ層の厚さは、北区南西壁中央部でⅠ層約20cm、Ⅱ層約10cm、Ⅲ層約5cmを測る。ただし、Ⅲ層については、薄く断続的な堆積層であり、10グリッド以東においては大部分が消失している。

遺構検出面はⅣ層上面だが、本来はⅢ層堆積後に掘削された遺構も少数存在するようである。Ⅳ層上面の標高は、最高所（f11・i11グリッド）で3.20m程度、最低所（f8・i9グリッド）で2.90m程度となり、東方が最も高く、西方が最も低くなる。

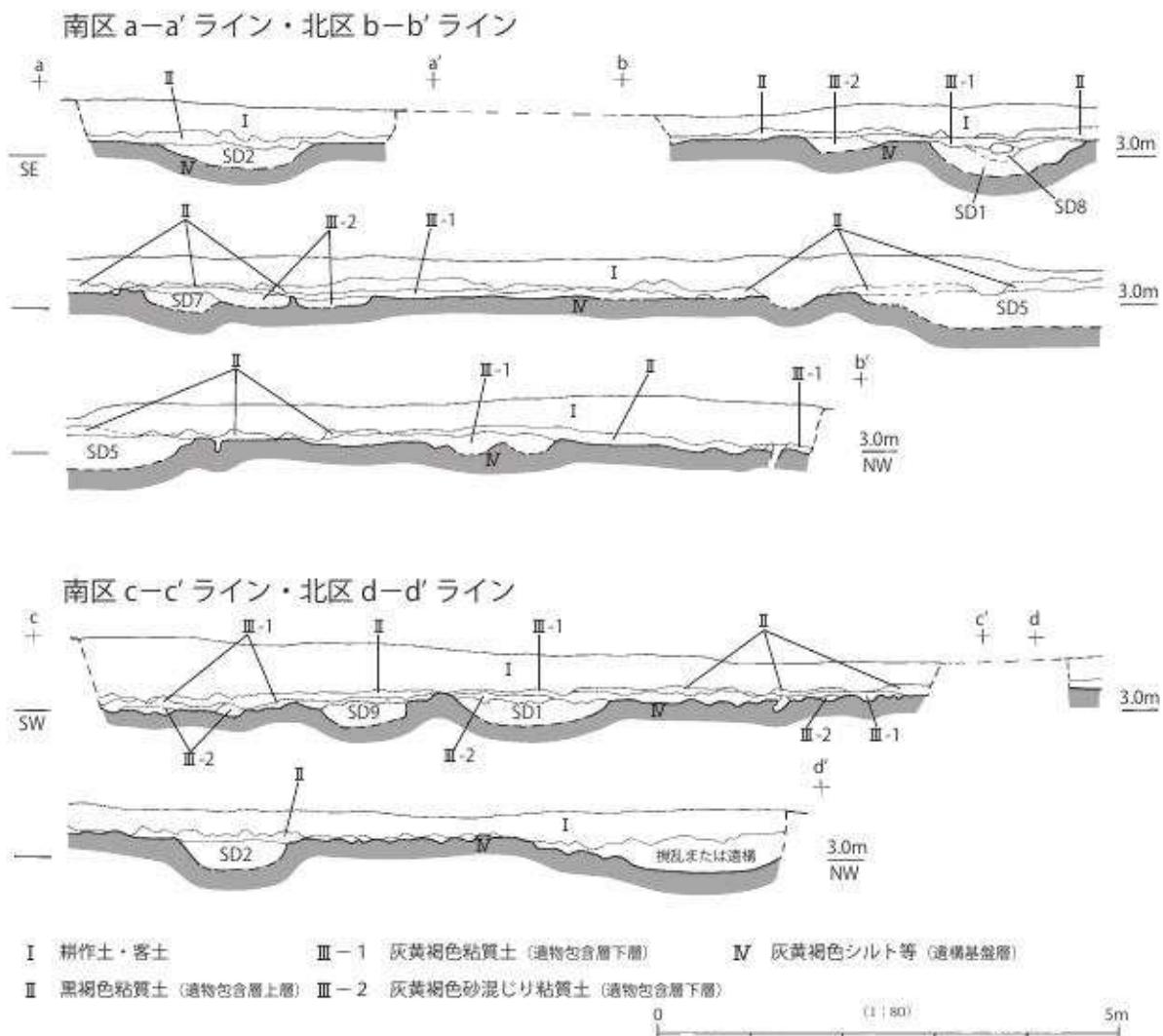
Ⅰ層は弥生土器・須恵器・陶磁器の小片がわずかに出土する。Ⅱ層は弥生時代中期後葉～古墳時代前期までの土器を含み、弥生時代後期前葉までの土器が多い。Ⅲ層は弥生時代前期～後期前葉までの土器を含み、中期後葉～後期前葉の土器が多い。このことから、Ⅱ層は古墳時代前期までに、Ⅲ層は弥生時代後期前葉までに堆積したことがわかる。

3 遺構の概要（第4図）

遺構は、弥生時代の溝、土坑、ピット等を確認した。遺構内出土遺物の大半は流入資料であったため、詳細な時期判定が困難なものが多いが、弥生時代前期後葉の遺構（溝SD6）弥生時代中期後葉の遺構（土坑SK5、溝SD1・2）弥生時代中期末～後期前葉ごろの遺構（土坑SK4、溝SD5・7・8）を確認した。その他の遺構については、出土遺物の大半が弥生時代中期後葉～後期前葉の範疇に収まる弥生土器であり、掘削時期もその前後が最も多いと思われる。SD3など、弥生時代後期中葉以降に掘削された遺構も少数存在する。



第4図 遺構配置図



第5図 調査区土層図

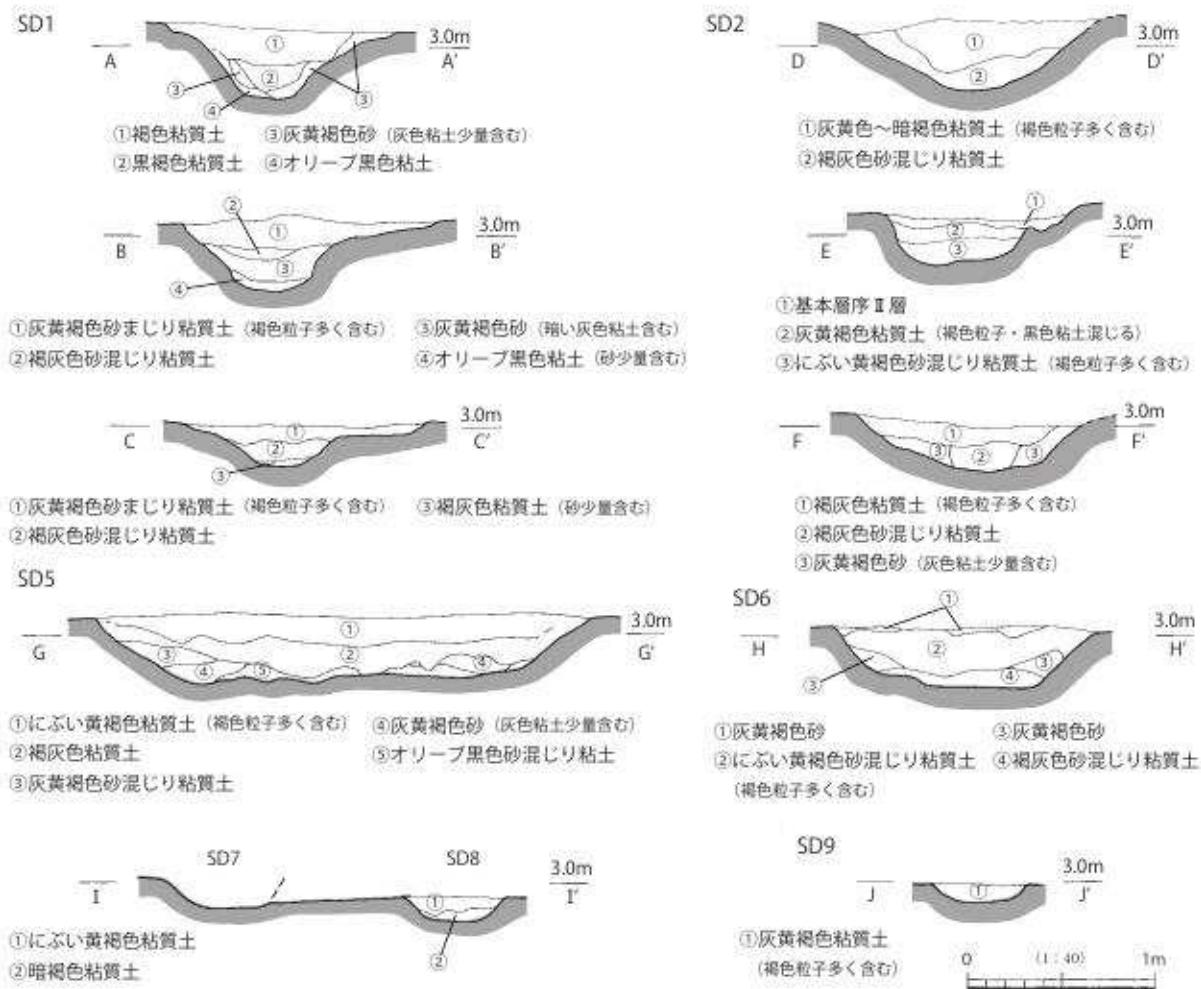
4 遺物の概要

各遺構内からは弥生土器・石製品のほか、SK 2でガラス小玉1点が出土した。遺物包含層II・III層からは弥生土器と少量の土師器・石製品等が出土したほか、e10グリッドII層で内行花文鏡の破鏡1点、f10～h10グリッドII・III層境界付近でガラス小玉3点が出土した。ガラス小玉3点はいずれも北区の限られた範囲で散在的に出土しており、ガラス小玉1点が出土したSK 2もこの区域である。

第2節 遺構

1 溝

SD 1 (第4・6図、図版4) SD 1は北区・南区両調査区の中央部で検出した、北北東-南南西方向に36m以上伸びる溝である。東に隣接するSD 2とほぼ平行して掘削されている。遺構上部は崩壊



第6図 遺構実測図1

が進んでおり、幅2.0m程度となる箇所もあったが、基本的には幅1.0m前後、底面幅25cm前後、深さ約20～40cmを測る溝である。底面の標高はいずれの地点においても2.75m前後であり、明確な水流方向は確認できない。

出土遺物は、埋土最上層①層から弥生時代中期後葉の土器片を確認している(第9図1～8)。遺構の時期も出土遺物と同様であろう。

SD2(第4・6図、図版4) SD2は、SD1の東側にほぼ平行し、SD1と同様、北区・南区両調査区で検出した、北北東～南南西方向に31m以上伸びる溝である。幅1.0～1.5m程度、床面幅40cm前後、深さ30～40cmを測る。底面の標高はいずれの地点においても2.8m前後であり、明確な水流方向は確認できない。

出土遺物は、埋土最上層(D・F断面①層、E断面②層)から弥生時代中期後葉の土器片、石製品を確認している(第9図9～15)。遺構の時期も出土遺物と同様と思われる。

SD3(第4図) SD3は北区北東端部のe10グリッドに位置する、西南西～東北東方向に伸びる溝である。長さ1.8m程度、幅約30cm、最深部の深さ約5cmを測る。削平を受けていると思われる。

出土遺物は存在しないが、遺構内に基本層序Ⅱ層のみが堆積していた。古墳時代前期までに掘削さ

れた溝であろう。遺構検出地点は基本層序Ⅲ層が削平されていた範囲であり、層位的にも矛盾はない。

SD 4 (第4図) SD 4 は北区北部の f 9 グリッドで検出した、西北西—東南東方向に伸びる溝である。長さ約 2.0 m、幅約 40cm、最深部の深さ約 10cm を測る。削平を受けているものと思われる。

埋土中に若干の弥生土器片を確認しているが、出土遺物からの時期判定は困難である。遺構面上に基本層序Ⅲ層の堆積があり、弥生時代後期前葉以前の掘削と考えられる。

SD 5 (第4・6図、図版5) SD 5 は、北区において検出した、西北西—東南東方向に 13 m 以上伸びる溝である。SD 1・2 埋没後に掘削されている。幅 2.5 m 前後、底面幅 1.5 m 前後、深さ 30cm 前後を測る。底面レベルはほぼ一定しており、明確な水流方向は確認できない。

出土遺物は、埋土①②層を中心に弥生時代中期後葉～後期前葉の土器片、石製品を確認している（第10図 16～26・第11図 27～32）。時期は、後期前葉である。

SD 6 (第4・6図、図版5) SD 6 は北区の北西部 e 9～g 9 グリッドで検出した、北北西—南南東方向に 10 m 以上伸びる溝である。最大幅約 1.4 m、底面幅 60cm 前後、最深部の深さ約 40cm を測る。南南東方向に向かって浅くなり、調査区北端から約 10 m の地点で消失する。

出土遺物は、埋土④層から弥生時代前期後葉の土器片を 2 点確認した（第11図 33・34）。遺構の時期を示すものとして良いと考えられる。白枝荒神遺跡において、これまでに確認された最も古い遺構である。

SD 7・8 (第4・6図、図版8) 北区の南端部 i10 グリッドに位置する、西北西—東南東方向に 3 m 以上伸びる 2 条の溝である。各幅 50～80cm 程度、最深部の深さ 15～20cm 程度を測る。東南東方向に向かって浅くなり、消失する。SD 7・8 間の距離は中心軸で約 1.2 m である。

SD 7・8 共に埋土直上には弥生時代後期前葉の遺物を含む基本層序Ⅲ層が堆積している。また、弥生時代中期後葉の SD 1 埋没以降に掘削された溝である。弥生時代中期末～後期前葉ごろの遺構として良いであろう。

SD 9 (第4・6図、図版5) SD 9 は南区の西部 k 9・19 グリッドで検出した、北北西—南南東方向に 3 m 以上伸びる溝である。SD 1 に隣接する、方位をやや異にする。幅 60～90cm、底面幅 20cm 前後、最深部の深さ約 20cm を測る。南南東方向に向かって浅くなり、底面の標高は北北西端で 2.8 m、南南東端で 2.9 m となる。

遺構内埋土中からは少量の弥生土器片を確認しており、弥生時代中期後葉の甕片（第11図 35）を含むが、遺構掘削の時期に伴うものは不明である。遺構面上に基本層序Ⅲ層の堆積があることから、弥生時代中期後葉以降、後期前葉以前の掘削と考えられる。

2 土坑

SK 1 (第7図、図版8) SK 1 は北区北部 f10 グリッドに位置する楕円形土坑である。長軸をほぼ東西方向にとり、長軸約 1.5 m、短軸約 1.0 m、最深部の深さ 18cm を測る。

出土遺物は若干の弥生土器片（第12図 36）を確認しているが、基本層序Ⅲ層が埋土となっており、遺構に伴う遺物ではないと思われる。時期についても、Ⅲ層の堆積時期と同様、弥生時代後期前葉ご

ろと思われる。

SK 2（第7図、図版6） SK 2はSK 1の南方g10グリッドに位置する楕円形土坑である。長軸を北北西—南南東にとり、長軸約1.9m、短軸約1.2mを測る。深さ10cm程度の非常に浅い土坑であるが、南側では20cm程度まで深くなる。

出土遺物は、埋土中から弥生時代中期後葉の土器片（第12図37・38）を、底面直上付近からガラス小玉1点（第12図39）を確認している。いずれも遺構の時期に伴うものかは不明であるが、ガラス小玉は直径7.2mmのやや大型品であり、弥生時代後期後半まで降る可能性がある。遺構検出地点は基本層序Ⅲ層が削平されていた範囲であり、層位的にも矛盾はない。

SK 3（第7図、図版5） SK 3は北区北端部付近e 9グリッドに位置する土坑である。SD 6埋没後に掘削されている。残存部から復元すると、長軸をほぼ南北方向にとる、長軸約1.7m、短軸約1.25m、深さ30cm程度の楕円形土坑であったと推測される。

出土遺物はないが、遺構面上に基本層序Ⅲ層の堆積があり、弥生時代後期前葉以前の掘削と考えられる。

SK 4（第7図、図版8） SK 4は北区北東端部e10グリッドに位置する不整形な長楕円形土坑である。SD 3掘削以前に埋没している。長軸を北北西—南南東方向にとり、長径2.6m前後、短径約1.0m前後、最深部の深さ約30cmを測る。

出土遺物は、埋土①層から弥生時代中期後葉～後期前葉の土器片（第12図40～47）を確認している。後期前葉の資料が遺構の時期に近いものと思われる。

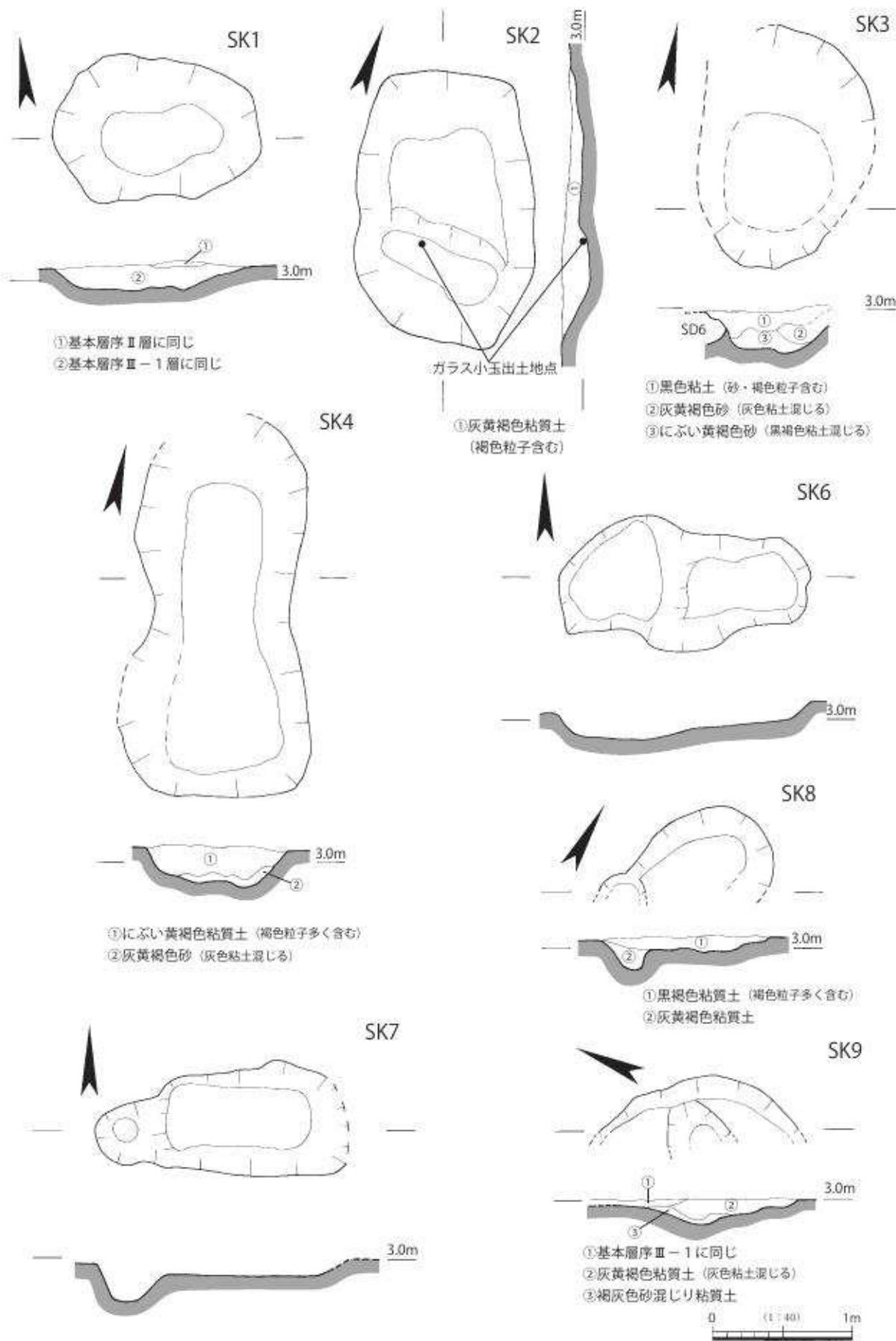
SK 5（第8図、図版6・14） SK 5はSK 2の南東g10グリッドに位置する楕円形土坑である。SD 1埋没後に掘削されている。長軸を北北西—南南東にとり、長軸1.75m、短軸1.0m前後、深さ約30cmを測る。一部調査区側溝部にかかる正確な短軸は計測できなかったが、調査区壁面まで遺構は広がっておらず、最大でも短軸1.1mまでに収まる。

埋土③層は木質の腐食層であり、面的に堆積していた。本来は土坑上に木製の蓋を乗せて土坑内の空間を保つ構造であったと思われる。また、③層上面には多くの弥生土器片とともに20cm大の泥岩割石1点（図版14）を確認した。木蓋の押さえ石であろうか。その規模・構造等から、土坑墓である可能性が高い。

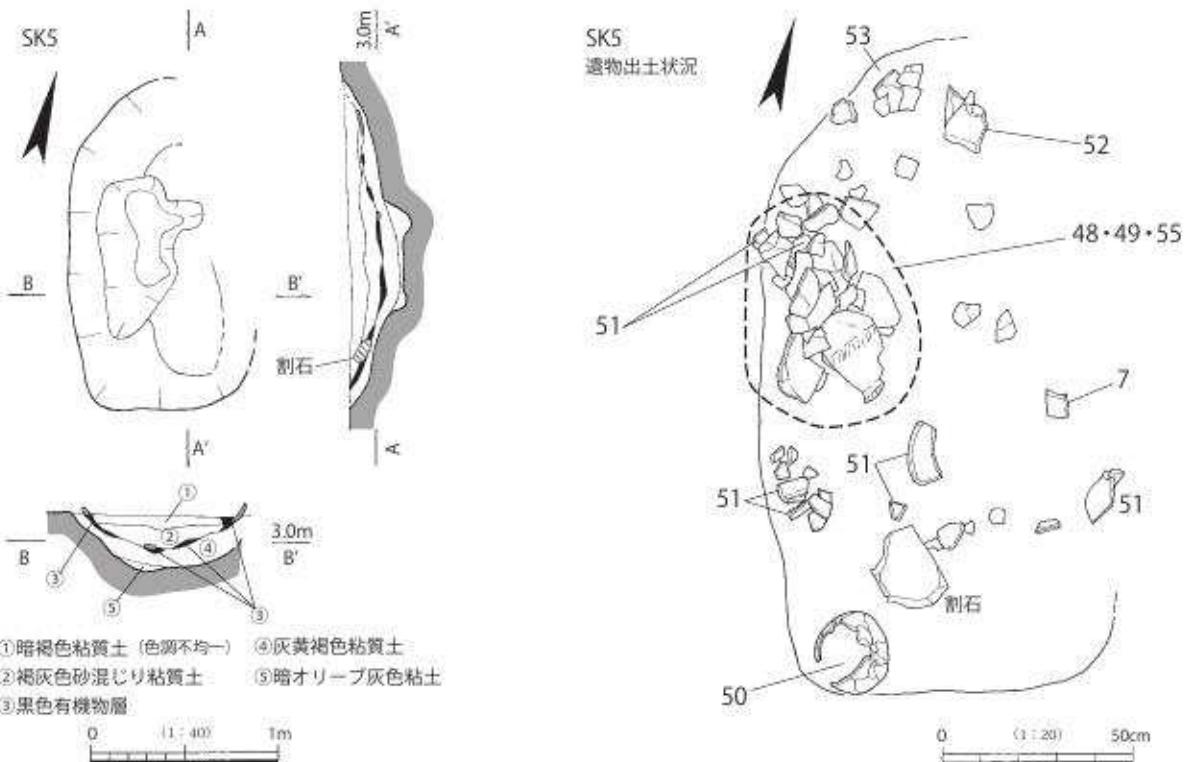
出土遺物は、③層上面に沿うように弥生時代中期後葉の甕・脚付鉢・高杯（第13図48～51・第14図52～57）を確認した。この内、甕48・49、脚付鉢50、高杯51は遺構に伴う土器とみて良い。1個体分の甕となると思われる48・49は、接合破片の出土位置はまとまっているものの、その配置に規則性はなく、破碎された状態と考えられる。脚付鉢50は口縁部が意図的に打ち欠かれ、上下反転した状態で出土した。高杯51は接合資料が広範囲に散在しており、甕と同様に破碎された状態と考えられる。これらは土坑墓への供献土器としての性格を持つものであろうか。

遺構の時期については出土土器と同様とみて良いが、SD 1埋没以降の遺構であることから、中期後葉においても比較的新しい時期の掘削と考えられる。

SK 6（第7図、図版8） SK 6はSK 2の西g 9グリッドに位置する不整形な長楕円形土坑である。



第7図 遺構実測図2



第8図 遺構実測図3

長軸をほぼ東西にとり、長軸 1.7 m 前後、短軸 0.7 m 前後、最深部の深さ 18cm を測る。

出土遺物はないが、遺構面上に基本層序Ⅲ層の堆積があり、弥生時代後期前葉以前の掘削と考えられる。

SK 7 (第7図、図版8) SK 7 は SK 6 の南西 g 9 グリッドに位置する不整形な長楕円形土坑である。

長軸をほぼ東西にとり、長軸 1.7 m 前後、短軸 0.7 m 前後を測る。深さは基本的に 15cm 前後であるが、遺構の西端においては深さ 30cm 程度までピット状に落ち込む。

出土遺物はないが、遺構面上に基本層序Ⅲ層の堆積があり、弥生時代後期前葉以前の掘削と考えられる。

SK 8 (第7図、図版8) SK 8 は南区南東壁面付近 k10・110 グリッドで確認した土坑である。調査区外へ続いており正確な形状は不明だが、北北東—南南西方向に長軸をとる長楕円形の土坑となるものと思われる。長軸 1.2 m 以上、短軸 0.7 m 以上、深さ約 10cm を測る。

出土遺物はないが、遺構面上に基本層序Ⅲ層の堆積があり、弥生時代後期前葉以前の掘削と考えられる。

SK 9 (第7図、図版8) SK 9 は南区南西壁面付近 l 9 グリッドで確認した土坑である。調査区外へ続いており正確な形状は不明だが、最大径 1.5 m 以上の円形または楕円形の平面形になると思われる。最深部の深さは 18cm であるが、大部分で深さ 5 ~ 10cm 程度となっており非常に浅い。

出土遺物はないが、遺構面上に基本層序Ⅲ層の堆積があり、弥生時代後期前葉以前の掘削と考えられる。

3 ピット群（第4図）

多数のピットを確認しているが、建築物等として連續性や柱の痕跡等が確認できるものは無い。直徑はSP 2・17・19・20・22が20～30cm、その他は全て直徑20cm未満の小規模なピットである。深さは30cmを超えるものがSP22のみで、深さ21～25cmのものがSP14・24、深さ16～20cmのものがSP 6・7・10・11・27、深さ11～15cmのものがSP 8・9・12・13・17・18・19、その他は深さ10cm以下の非常に浅いピットであった。ピット内埋土については、基本的に灰黄褐色粘質土またはにぶい黄褐色粘質土のみであり、例外としてSP22・28・29が黒褐色粘質土である。後者の埋土は基本層序Ⅱ層に類似しており、弥生時代後期～古墳時代前期のピットであろう。

第3節 遺物

1 遺構内出土遺物

遺構内出土遺物については、その大半が流入品と思われる破片資料である。唯一SK 5においては、遺構に意図的に配置されたと考えられる遺物が確認できた。

(1) 溝出土遺物

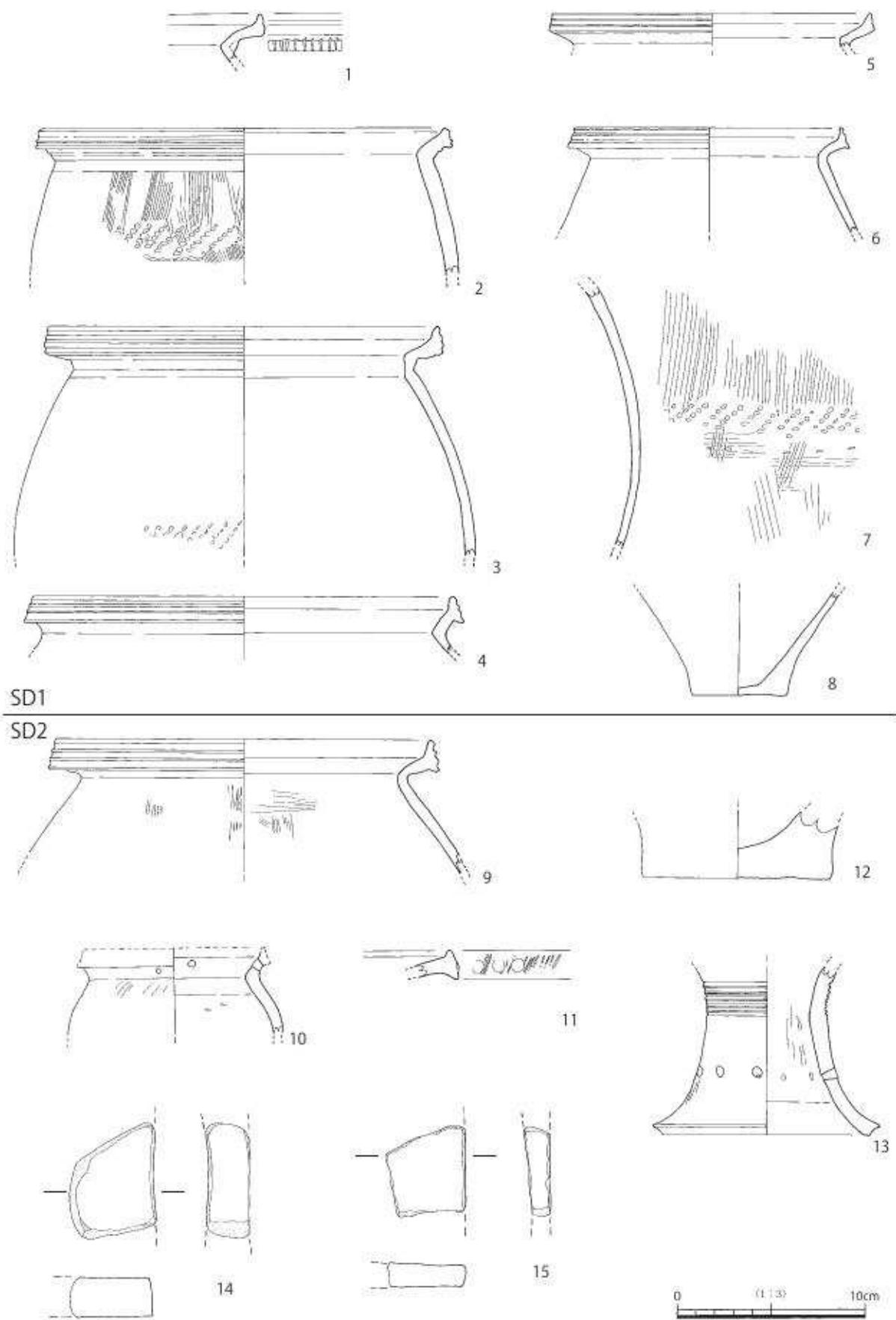
SD 1出土遺物（第9図、図版9） 弥生土器甕片を確認した。1は頸部刻目凸帯文が、2・3・7は胴部列点文が施されている。時期判別可能な資料については全て弥生時代中期後葉の特徴を持つ甕である。

SD 2出土遺物（第9図、図版9・13） 弥生土器片、石製品を確認した。9～12は弥生土器壺あるいは甕片で、10には口縁部円形穿孔・肩部刻目文が、11には口縁端部刻目文・円形浮文が施されている。13は弥生土器高杯等の脚部で、凹線文・円形スカシが施されている。14・15は凝灰岩質の砥石と考えられる。風化が著しく研磨痕は明確でないが、それぞれ3面に滑らかな磨減面が確認できる。時期判別可能な資料については、全て弥生時代中期後葉の範疇でとらえられるものである。

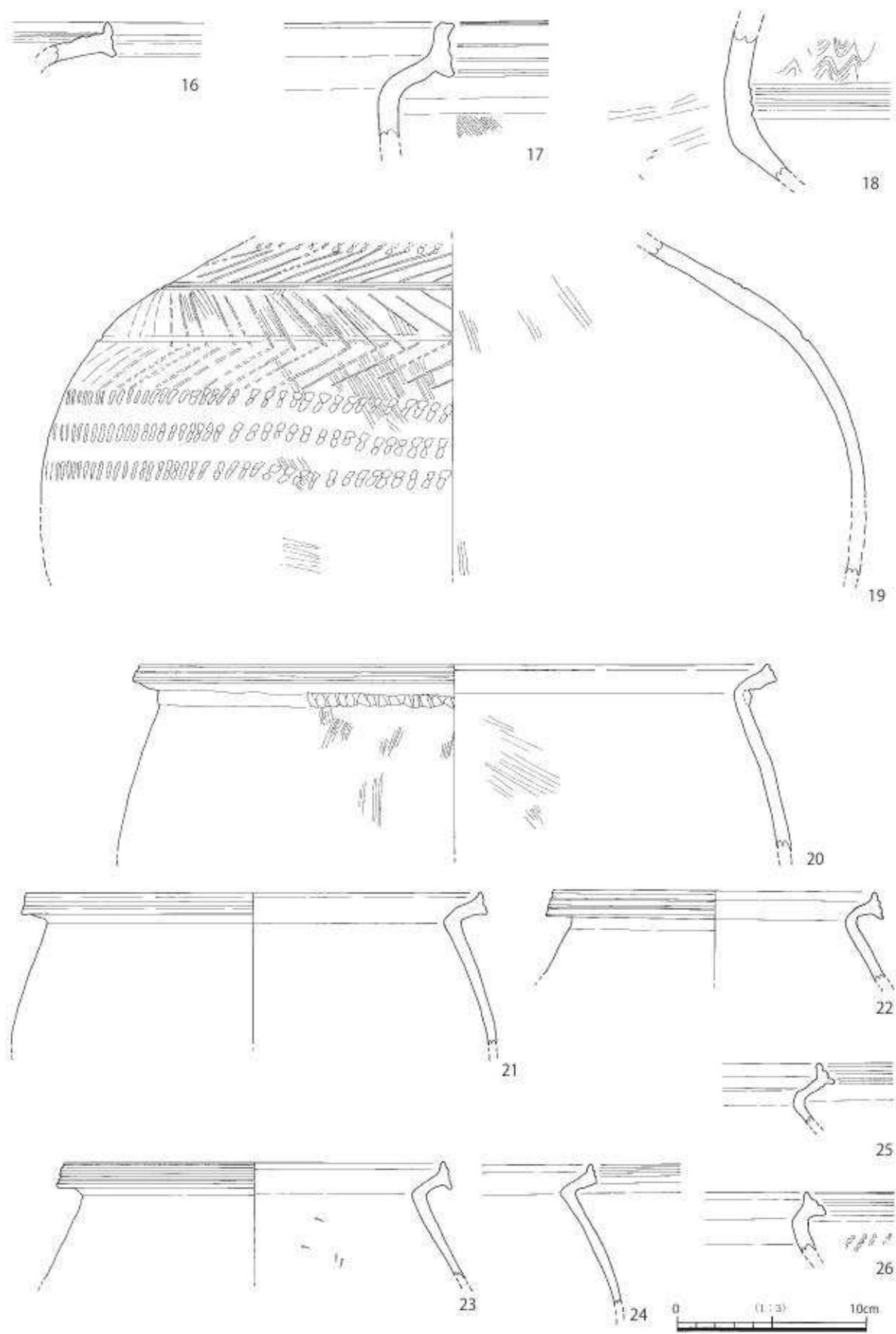
SD 5出土遺物（第10・11図、図版9・13） 弥生土器片、石製品を確認した。16～31は弥生土器壺あるいは甕片で、16には口縁内面凹線文が、18には頸部凹線文・波状文が、19には胴部上半部へラ描き有軸羽条文・頸部付近と胴部最大径付近に列点文が、20には頸部指頭圧痕文帯が、26には頸部付近に列点文が施されている。19の列点文は2点1単位となる特徴的なものである。32は頁岩の砥石と考えられる石製品である。残存する4面は全て研磨痕が確認できる。時期判別可能な資料については、大半が弥生時代中期後葉の特徴を持つものであったが、17、18、23などについては後期前葉ごろの特徴を示すものであり、遺構の時期を示す資料と思われる。

SD 6出土遺物（第11図、図版10） 弥生土器甕口縁部片2点を確認した。34は胴部に1条の浅い沈線が施される。いずれも弥生時代前期後葉の資料であろう。遺構の時期を示す資料と思われる。

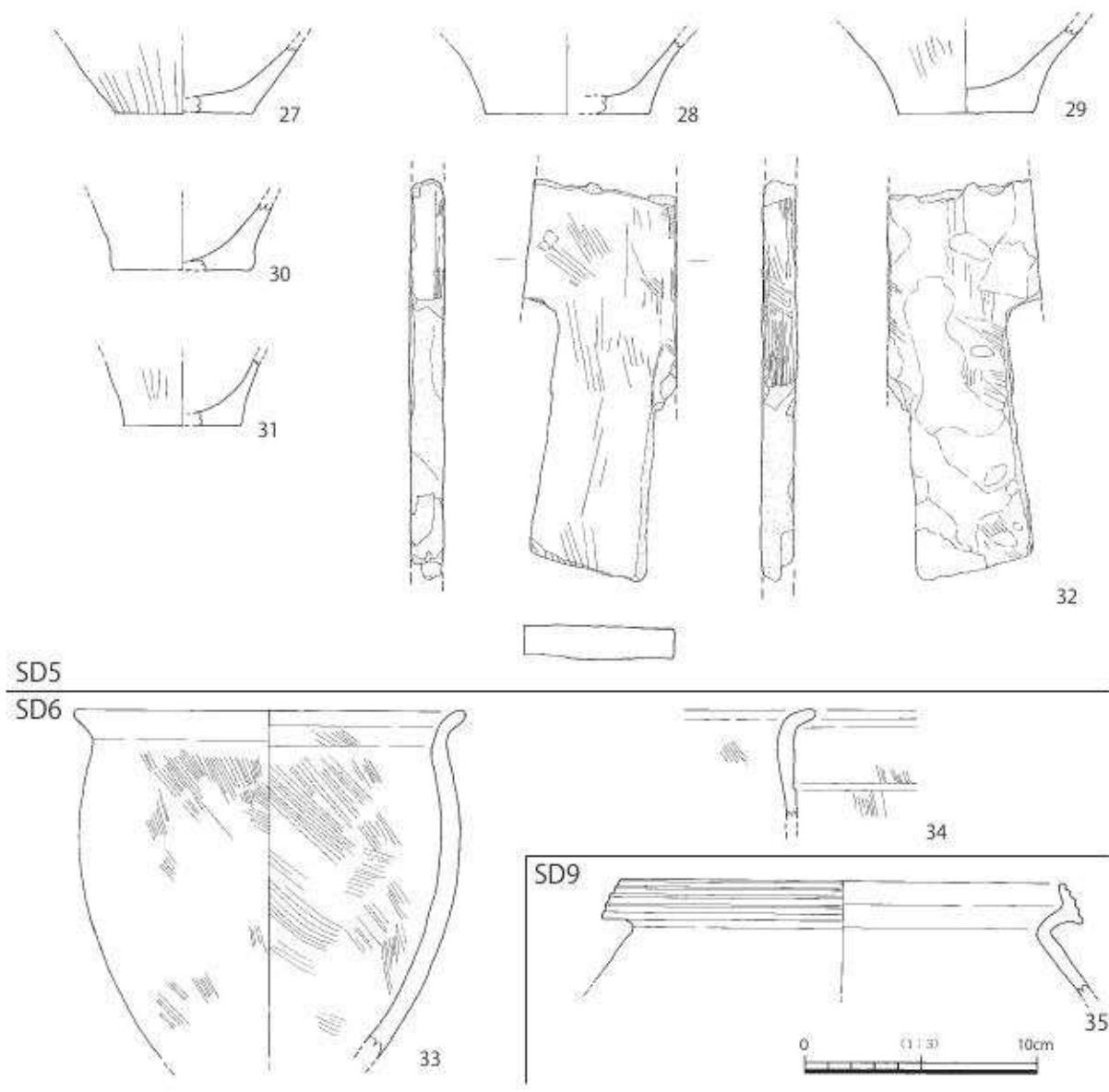
SD 9出土遺物（第11図、図版10） 少量の弥生土器片を確認したが、図化可能な資料は弥生土器甕



第9図 SD 1・2出土遺物実測図



第10図 SD 5出土遺物実測図



第11図 SD 5・6・9出土遺物実測図

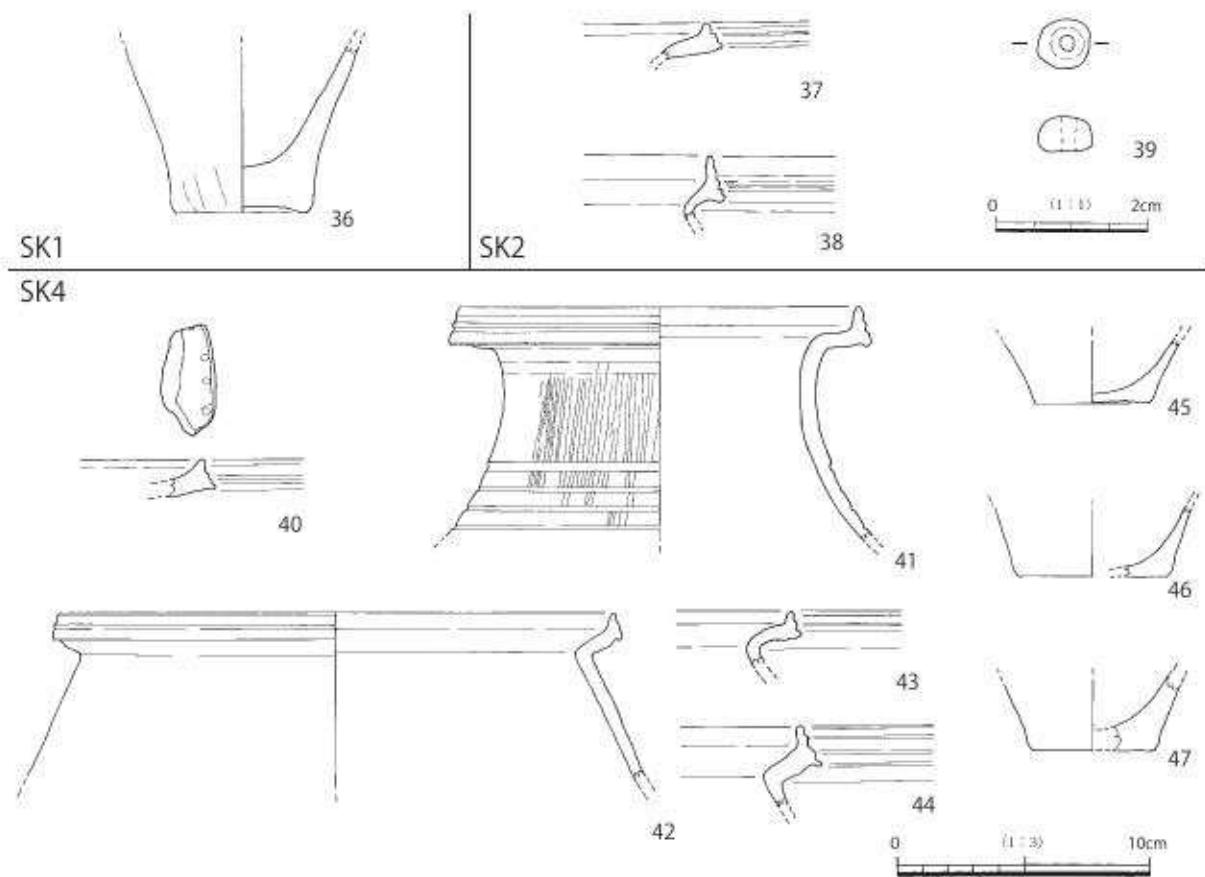
片35のみであった。弥生時代中期後葉の特徴を持つが、遺構の時期に伴うものかは不明である。

(2) 土坑出土遺物

SK 1出土遺物（第12図、図版10） 少量の弥生土器片を確認したが、図化可能な資料は弥生土器甕等底部片36のみであった。遺構の時期に伴うものかは不明である。

SK 2出土遺物（第12図、図版2・10） 弥生土器小片（37・38）、ガラス小玉1点（39）を確認した。弥生土器37・39は甕口縁部小片で、弥生時代中期後葉の特徴を示す。ガラス小玉39は直径7.2mmのやや大型品、孔に平行した方向に伸びる気泡が観察でき、引き伸ばし法（大賀2002）で製作されている。色調は淡青色、材質はカリガラスと思われる⁽¹⁾。いずれも遺構の時期に伴うものかは不明である。

SK 4出土遺物（第12図、図版10） 弥生土器壺甕片を確認した。40の口縁端部上面には刻目文が、41の頸部付近には凹線文が施される。時期判別可能な資料の多くが弥生時代中期後葉の特徴を持つ



第12図 SK1・2・4出土遺物実測図

ものであったが、41については口縁部等の特徴から後期前葉ごろの資料である。遺構の時期を示すものとして良いであろう。

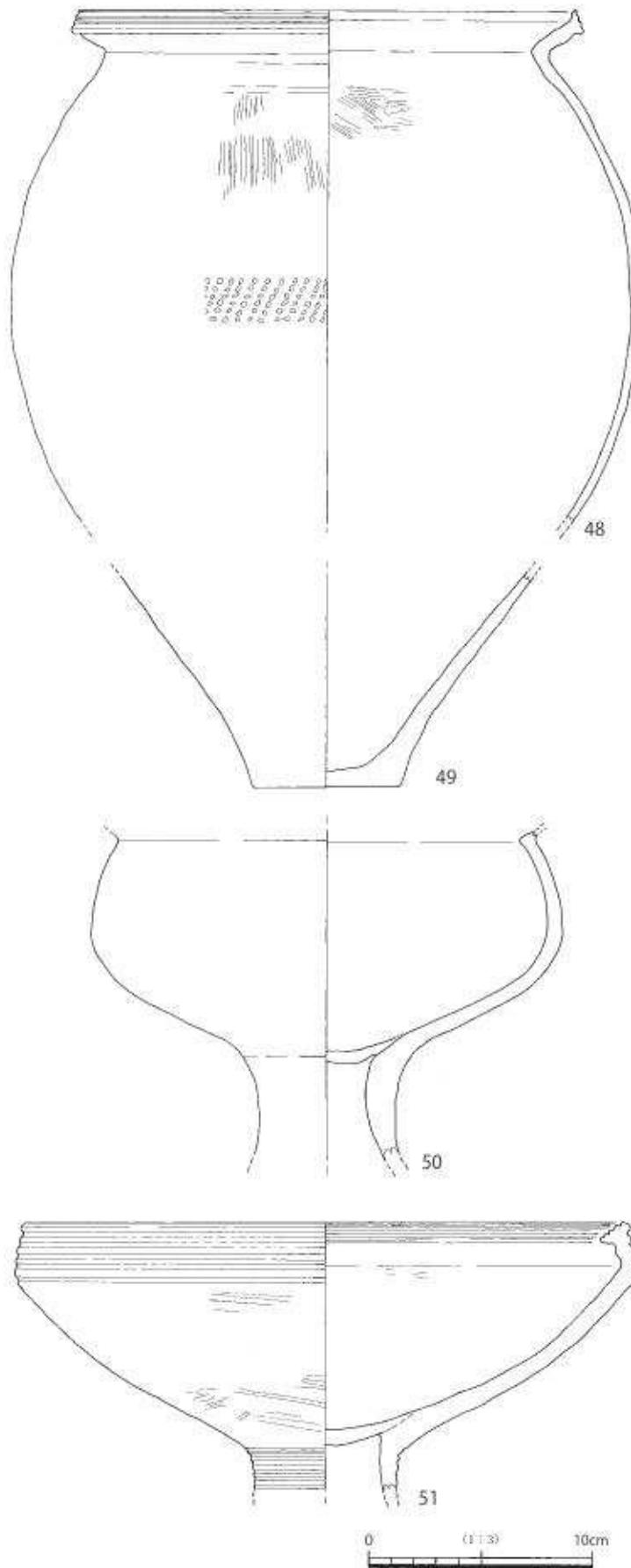
SK5出土遺物（第13・14図、図版8） 弥生土器甕・脚付鉢・高杯等を確認した。48・49は同一個体と思われる甕で、胴部最大径付近に列点文が施される。50は脚付鉢で、口縁と脚端部を欠く。口縁は均等に欠損しており、意図的に打ち欠いたものと思われる。51は高杯で、脚部の大部分を欠く。口径27.5cmの大型品で、口縁端部と外面、脚部に凹線文が施される。52～57は流入資料の可能性がある弥生土器甕等の破片である。52～54は口縁から胴部、55は胴部、56・57は底部の破片で、52・55では胴部最大径付近に列点文が施される。図化できなかった細片資料中には弥生時代中期中葉の土器も若干混在していたが、基本的には中期後葉の特徴を示す遺物群である。

2 遺構外出土遺物

遺構外遺物については、II・III層出土遺物の内、特徴的な資料と比較的残存状況の良好な資料を抽出して図示している。

土器は、III層から弥生時代前期後葉～弥生時代後期前葉の土器が、II層から弥生時代中期中葉～古墳時代前期の土器が混在して出土した。弥生後期後半以降の土器（第18図109～115）については層位不明（IIないしIII層）の112・115を除き全てII層からの出土である。

また、破鏡（第20図120）はII層から、ガラス小玉（第20図121～123）はいずれもII・III層境



第13図 SK 5出土遺物実測図1

界付近から出土している。

(1) 弥生時代前期～中期中葉の土器 (第15図、図版10・11)

58・59は弥生時代前期後葉の土器である。58が壺口縁、59が甕胴部である。いずれも口縁境界付近にハケ目原体等による不明瞭な段が施される。

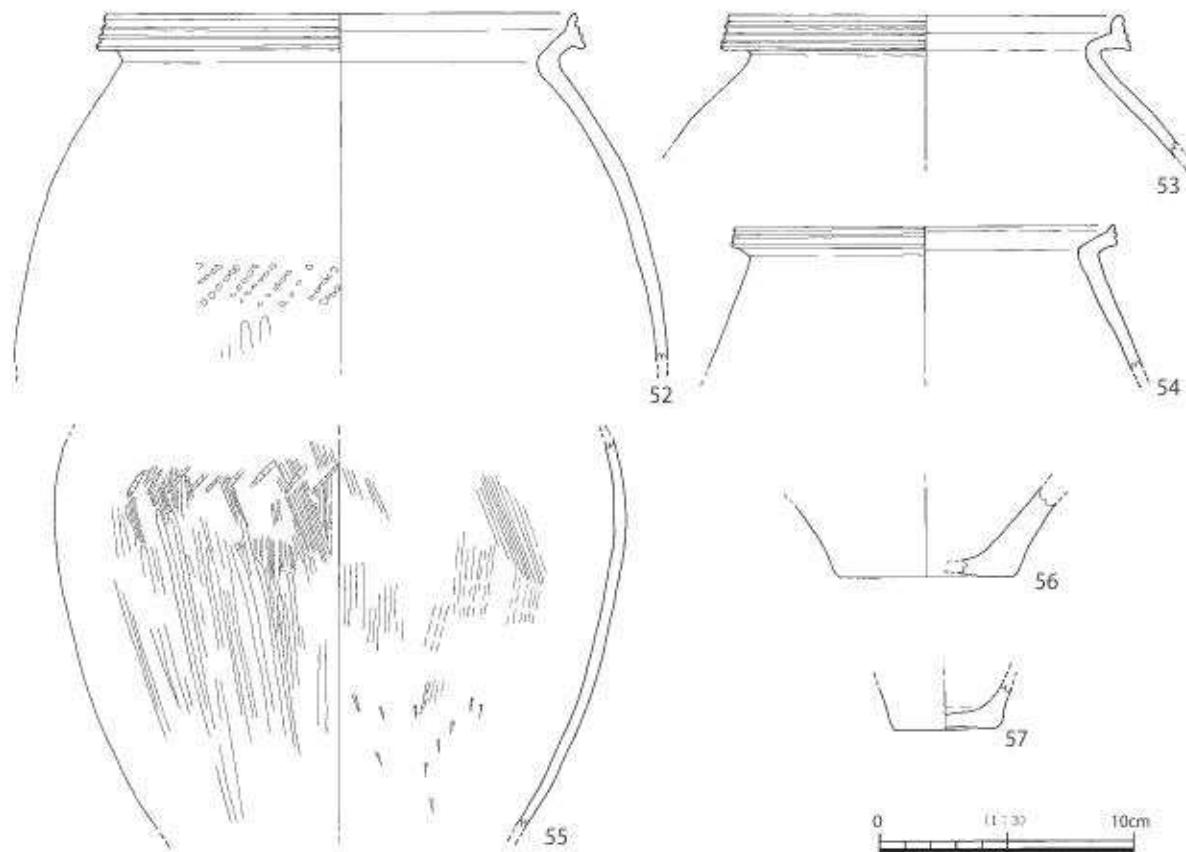
60は弥生時代前期～中期前葉の壺あるいは甕の口縁端部である。端部に刻目文が、外面に直線文が施される。

61～69は弥生時代中期中葉の土器である。61・62が広口壺口縁部、63～67が甕、68は直口壺等の口縁部であろう。69が高杯の杯部である。62の口縁拡張部に羽状文が、68・69の外面に凹線文が施される。

(2) 弥生時代中期後葉～後期前半の土器 (第15～18図、図版10～12)

70～86は弥生時代中期後葉の土器である。70～74が広口壺口縁部、75～82が甕、83～86が高杯である。70の口縁拡張部に刻目文・円形浮文が、72の内外面、73・74の内面に凹線文が、76～78の頸部に指頭圧痕文帯が、77・80の胴部最大径付近に列点文が、85脚部外面に凹線文が施される。

87～101は弥生時代中期末～後期前葉の土器である。87～100が甕、101が高杯の脚部である。90・91の胴部上半、95～97の頸部付



第14図 SK 5出土遺物実測図2

近に刻目文等が施される。

102～108は弥生土器壺や甕等の頸部から底部にかけての破片である。詳細な時期判定は難しいが、おおむね弥生時代中期後葉～後期前半を中心とした時期のものであろう。102の肩部には直線文と波状文が、103の頸部には凹線文と竹管文が施される。108の底部には低い台が付く。

(3) 弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器（第18図、図版11・12）

109～115は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての弥生土器・土師器である。109・110が壺、111が甕口縁部、112が注口土器注口部、113が鼓形器台筒部、114・115が壺あるいは甕の底部である。109・110の頸部には板状工具による羽状文が、113の筒部には貝殻腹縁による羽状文が施されるほか、111の口縁下部に2箇所の円形穿孔が確認できる。

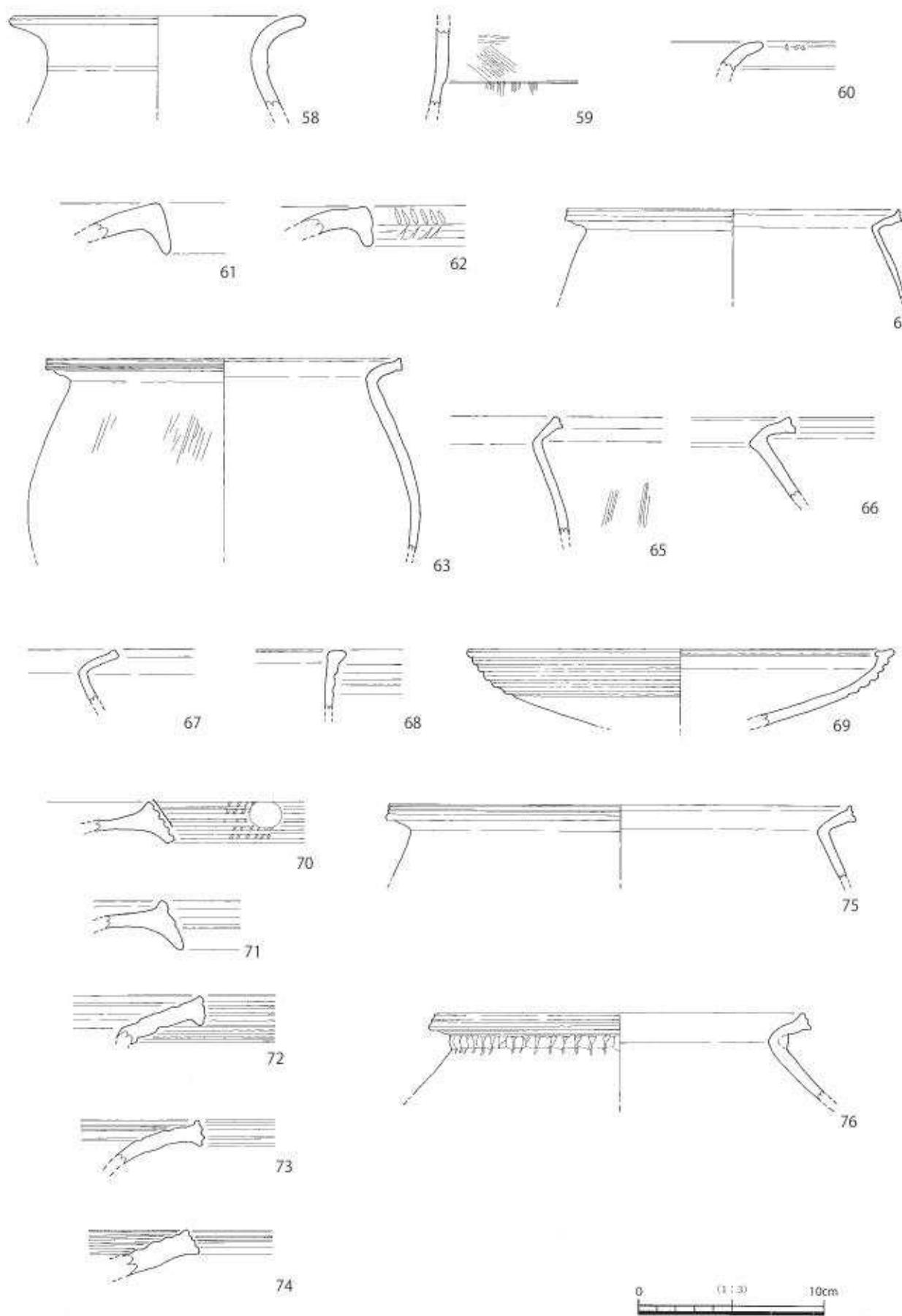
(4) 石製品（第19図、図版13）

116～119は石製品で、116が石鋸、117～119が砥石である。材質は116が紅簾片岩、117が凝灰岩、118が頁岩、119が泥岩である。

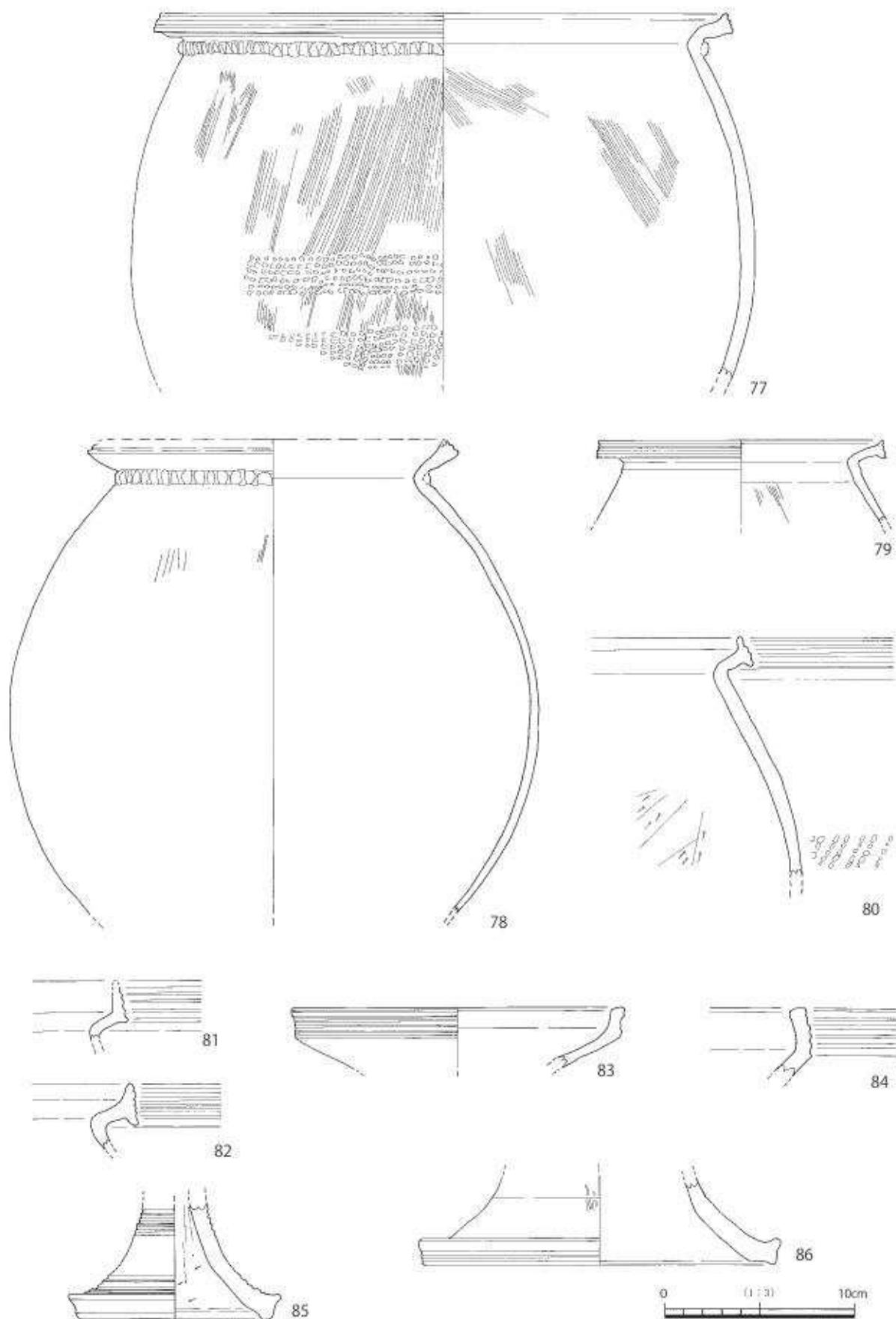
(5) 青銅製品・ガラス製品（第20図120～123、図版2）

基本層序II層e10グリッドより青銅鏡片が1点（第20図120）、II・III層境界部付近f10～h10グリッドの範囲よりガラス小玉3点（第20図121～123）が出土した。青銅鏡片・ガラス小玉の出土点については、SK 2出土小玉（第12図39）も含め第22図に図示した。

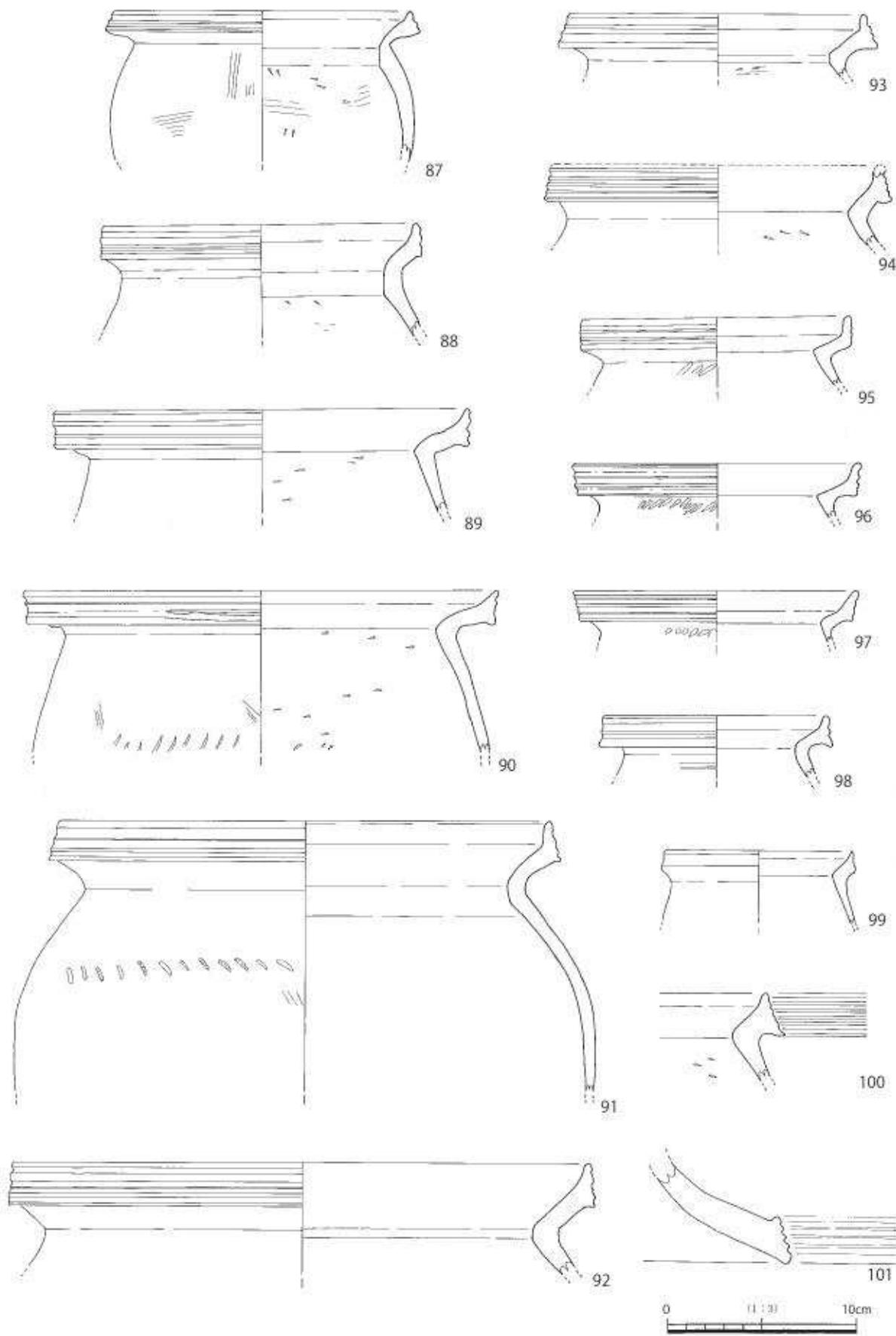
120は青銅鏡片で、内行花文鏡の破鏡と考えられる。5.8×1.8cmの破片で、雷雲文帯の内縁部か



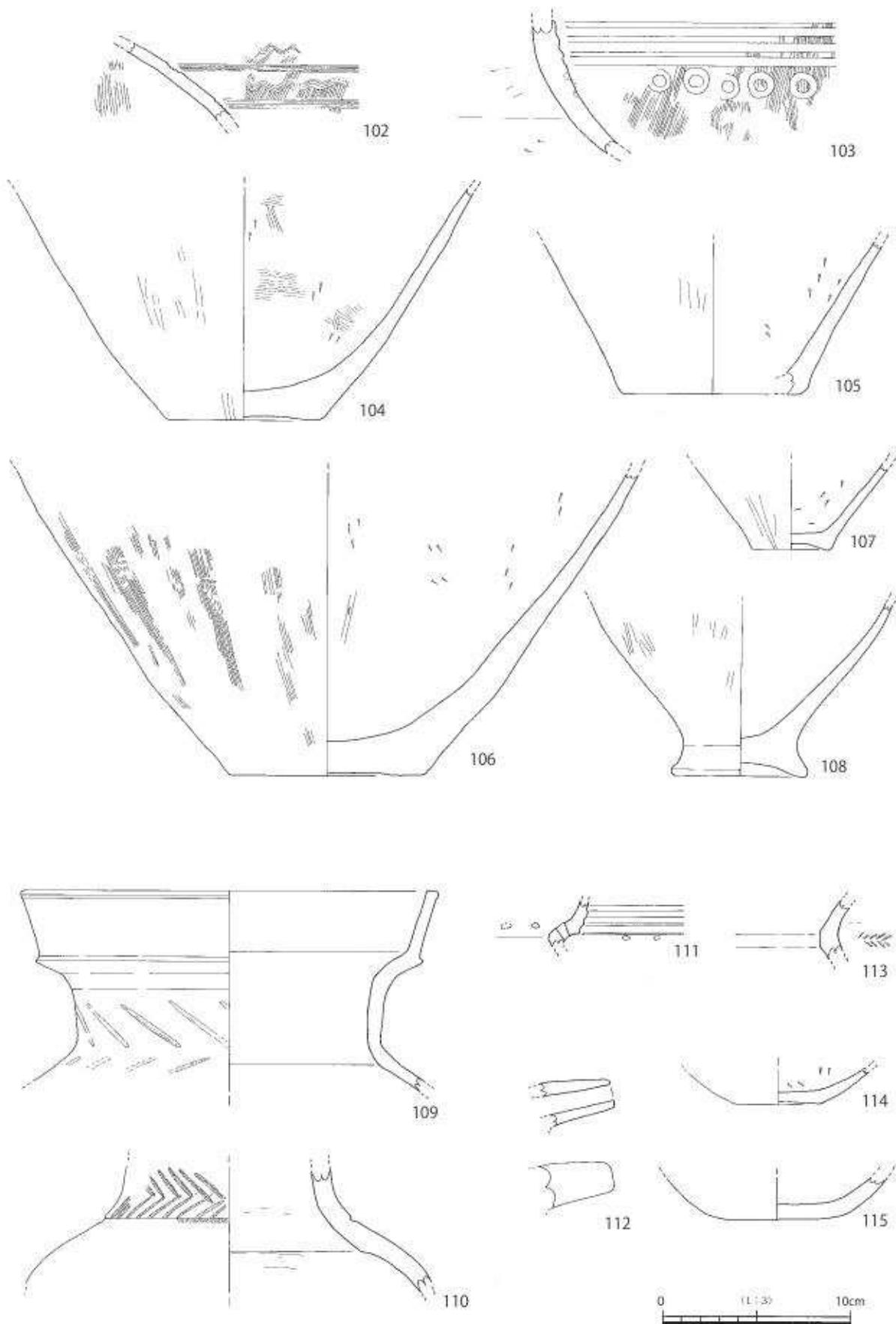
第15図 遺構外出土土器実測図1



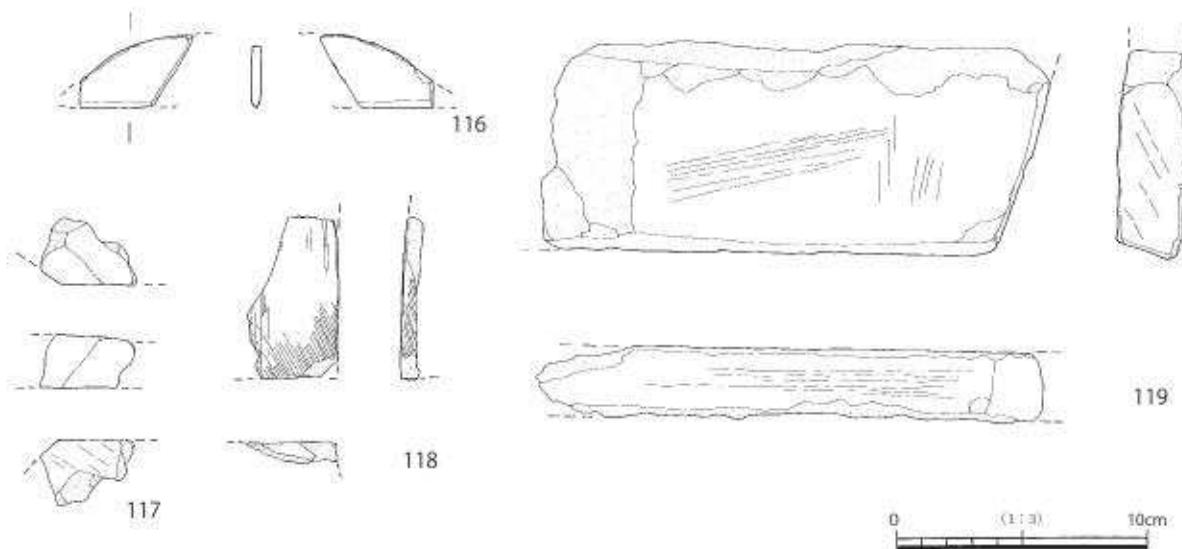
第16図 遺構外出土土器実測図2



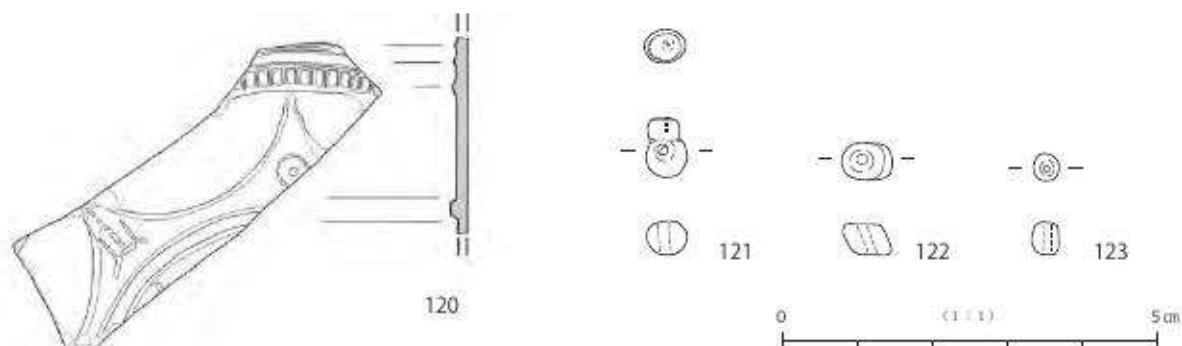
第17図 遺構外出土土器実測図3



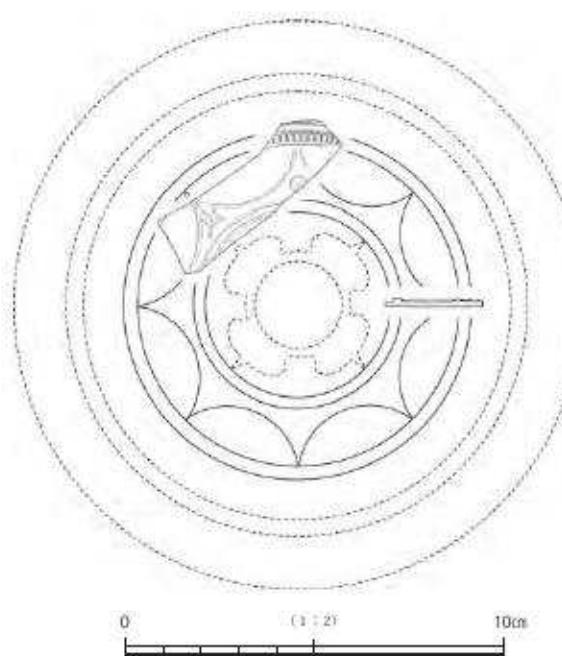
第18図 遺構外出土土器実測図4



第19図 遺構外出土石製品実測図



第20図 遺構外出土破鏡・ガラス小玉実測図

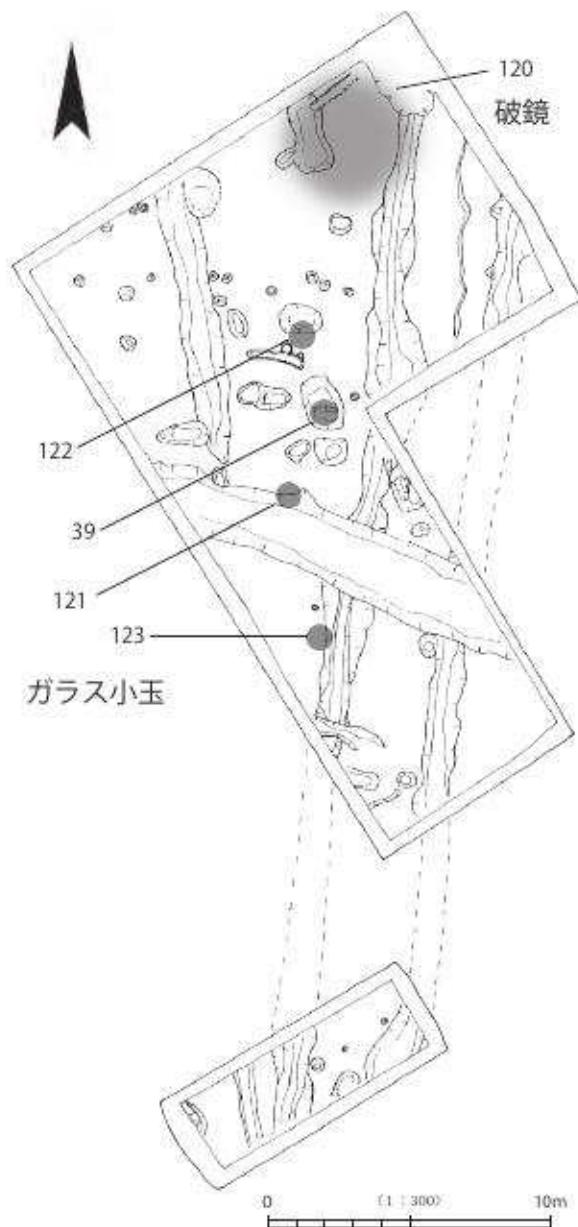


第21図 破鏡復元想定図

ら紐座外縁部までが確認できる。雷雲文帯と連弧文帯の間には櫛目文帯が、連弧文間には山形文と円圏珠文が、連弧文帯と紐座の間には圈帯がある。また、紐座には四葉座端部とみられる文様も残存する。岡村氏の分類（岡村 1993）四葉座Ⅲ・Ⅳ式、漢鏡5期後半にあたり、1世紀後半を中心とする時期に製作された後漢鏡と同型式のものである。復元直径は15cm前後となるであろう（第21図）。破面の磨滅は少なく均等であり、破鏡となった後の二次的な欠損はほぼ受けていないものと思われる。また、文様についても磨滅が少なく遺存状態は非常に良好であるが、鋳出しは全般にやや甘く、文様の角は全般にやや丸みを帶び、山形文・円圏珠文につ

いては部分的に途切れた箇所も見られる。鋳出し状況から、踏み返し鋳造が行われた可能性も否定できないため、実際の製作時期については2世紀代まで下る可能性もある⁽²⁾。出土層位からは、弥生時代後期～古墳時代前期の間に流入したことが想定される。

121～123はガラス小玉である。121については2点のガラス小玉が製作最終段階の加熱によって融着している。直径3.5～5.5mmとばらつきがあるが、いずれも孔に平行した方向に伸びる気泡が観察でき、引き伸ばし法（大賀2002）で製作されている。色調は基本的に透き通った淡青色であるが、121についてはやや緑がかる。材質はカリガラスと思われる⁽¹⁾。弥生時代後期前葉～中葉ごろに流入した資料であろうか。また、前述のSK2出土ガラス小玉1点（第12図39）もやや大ぶりながらその特徴と出土エリアは共通しており、同一状況において散逸した資料である可能性がある。



第22図 破鏡・ガラス小玉出土位置図

註

- (1) ガラス小玉については田村朋美氏に実見いただき、製法・材質についてご教授いただいた。
- (2) 破鏡については岩本宗氏、岡村秀典氏、南健太郎氏に実見いただき、型式・時期等についてのご指導をいただいた。踏み返しの可能性、2世紀代まで製作時期が降る可能性については南氏の見解による。

参考文献

- 大賀克彦 2002 「島根県下のガラス製品」『島根考古学会誌』第19集 島根考古学会 99～122頁
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集 国立歴史民俗博物館 39～82頁
- 松本岩雄 1992 「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社 413～482頁
- 赤沢秀則 1992 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書」5 南講武草田遺跡 鹿島町教育委員会

第4章 総 括

第1節 遺跡の規模と立地

今回の調査に先立つ遺跡の範囲確認調査等において、白枝荒神遺跡が従来把握されていた範囲より大きく広がっていることが確認できた。遺跡南方に隣接して存在する小畠遺跡に連続した集落遺跡であることはほぼ確実で（第1章参照）、東西200m以上、南北400m以上の範囲に弥生時代を中心とした集落が広がっていたこととなる。

遺跡は、弥生時代において出雲平野西部に広がっていた潟湖の東汀線付近、南北方向に伸びる微高地上に立地している（高橋2011）。また、過去の調査で発見された「サメ」の絵画土器（出雲市教育委員会1998）からは、そこで生活していた人々と外海との深い結びつきもうかがえる。また、隣接する小畠遺跡の花粉分析（島根県教育委員会2007）では、安定した堆積環境が続くようになると同時にイネ科花粉が高率を示すようになることが指摘されており、集落の近くには水田も広がっていたようである。

第2節 各期における遺跡の様相

1 弥生時代前期

今回の調査地北区で確認された溝SD6は弥生時代前期後葉の遺構である。また、南区の遺物包含層からも前期の弥生土器片2点が出土している。

遺構・遺物とともにわずかな量であったが、弥生時代前期に遡る遺構・遺物は、過去の調査で確認されていなかったものである。今回の調査によって、白枝荒神遺跡の集落開始期が弥生時代前期まで遡ることが確実になった。

2 弥生時代中期～後期前半

今回の調査地では弥生時代中期後葉～後期前葉の溝・土坑等が最も多く確認された。遺構外出土遺物も当該期の資料が最も多い。弥生時代中期中葉の遺物も確認されるが、資料



第23図 白枝荒神遺跡・小畠遺跡の調査地配置図

数は多くない。

過去の調査地においても、弥生時代中期後半～後期前半の時期は遺跡範囲のほぼ全域で遺構・遺物が確認され、遺物の出土量も最も多い。集落の最盛期といえる時期である。2000（平成12）年度調査区においては、九州北部の須玖II式土器に影響を受けた土器も確認されており（出雲市教育委員会2002）、弥生時代中期後葉の段階から九州北部と交流があった集落であることを示している。

3 弥生時代後期後半～古墳時代前期

今回の調査地では弥生時代後期後半以降の明確な遺構は溝SD3のみであった。そのほかにも、当該期まで下る可能性がある遺構も少数存在するが、その数が減少していることは疑いない。遺構外出土遺物についても、極少量の資料が確認されるのみであった。ただし、今回の調査で出土した舶載品、破鏡やガラス小玉については、当該期まで含めて使用時期を想定すべき資料である。

過去の調査地においては、1993～1996（平成5～8）年度調査区の中央部を中心に当該期の溝・土坑・土器群等多くの遺構・遺物が確認されている（出雲市教育委員会1998）。集落範囲については縮小の傾向がみられるものの、遺物の出土量は比較的多く、吉備の特殊壺や西部瀬戸内系土器等、他地域由来の遺物も確認される。

4 古墳時代中期以降

古墳時代中期の明確な遺構・遺物は、これまでの調査を通じて確認されておらず、古墳時代後期以降においても確認される遺構・遺物はわずかである。古墳時代前期の間に集落の急速な衰退があったと思われる。これについては、出雲平野の平野部集落において数多くみられる現象であり、地域的な動向といえよう。

第3節 出雲地方周辺の漢鏡

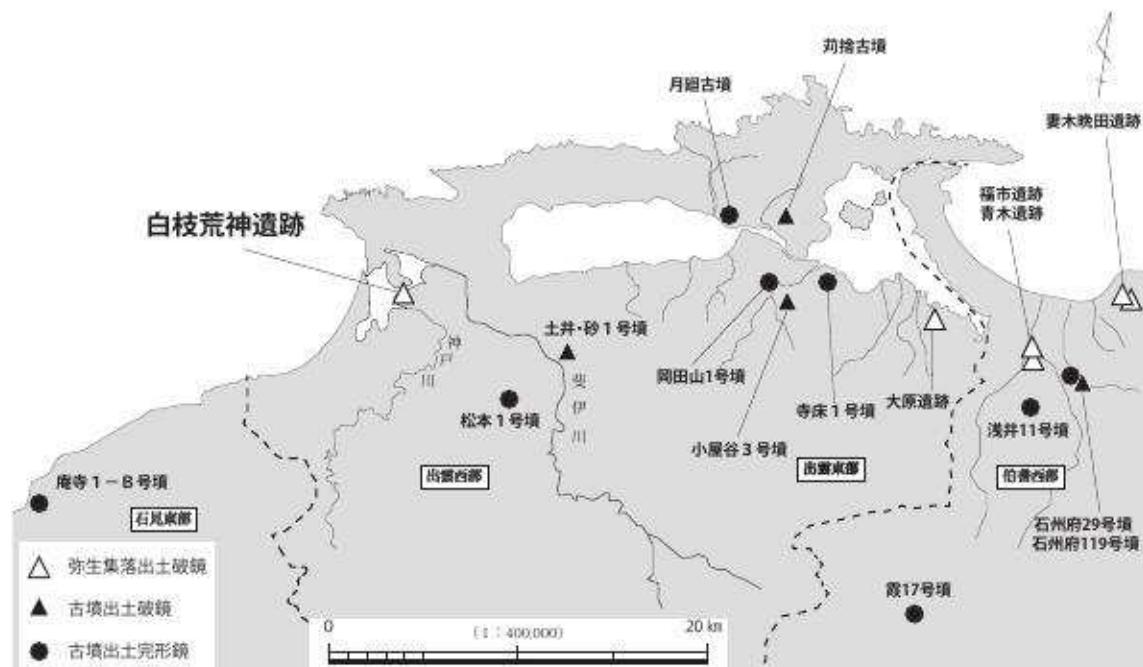
今回の調査で発見した破鏡（第20図120）は、残存部の形状から漢鏡5期後半期、1世紀後半を中心とする時期に後漢で作成された内行花文鏡（四葉座内行花文鏡III・IV式）と考えられる（岡村1993）。日本においては弥生時代後期後半期を中心に入手・使用されたものと考えられている。また、破面・文様共に磨滅は少なく、長期間の伝世はなされていないと見てよい。弥生時代後期後半を中心とした時期に白枝荒神遺跡の集落において入手・使用・廃棄されたものであろう。

白枝荒神遺跡出土破鏡の位置づけを検討するにあたり、出雲地方及びその周辺地域における漢鏡出土遺跡について概観してみたい（第1表、第24・25図）。

出雲地方以西、響灘までの日本海沿岸地域においては、これまで弥生時代の遺跡から漢鏡が出土した例がほとんど無く⁽²⁾、基本的に古墳時代まで伝世された古墳副葬資料のみであった。唯一の例外として伯耆地方の近くに位置する集落遺跡、大原遺跡において漢鏡と思われる破鏡が確認できるが、鏡種不明、廃棄時期不明の資料である。いずれにしても、白枝荒神遺跡出土破鏡は日本海沿岸エリアにおける弥生時代漢鏡分布の空白地帯を埋める貴重な発見となった。

一方、出雲地方より東に目を向けると、近隣の伯耆地方西部においては弥生時代遺跡出土の漢鏡の分布が一定エリアに集中していることがわかる。隣接する大原遺跡例を含めると4箇所の集落遺跡から漢鏡の破鏡5点が発見されている。特に妻木晚田遺跡では複数の破鏡が出土しており、出雲平野周辺地域との分布状況の相違が顕著である。このような分布状況の相違が地域内における破鏡拡散形態の差異である可能性を指摘された南氏の見解（第4節参照）は重要である。

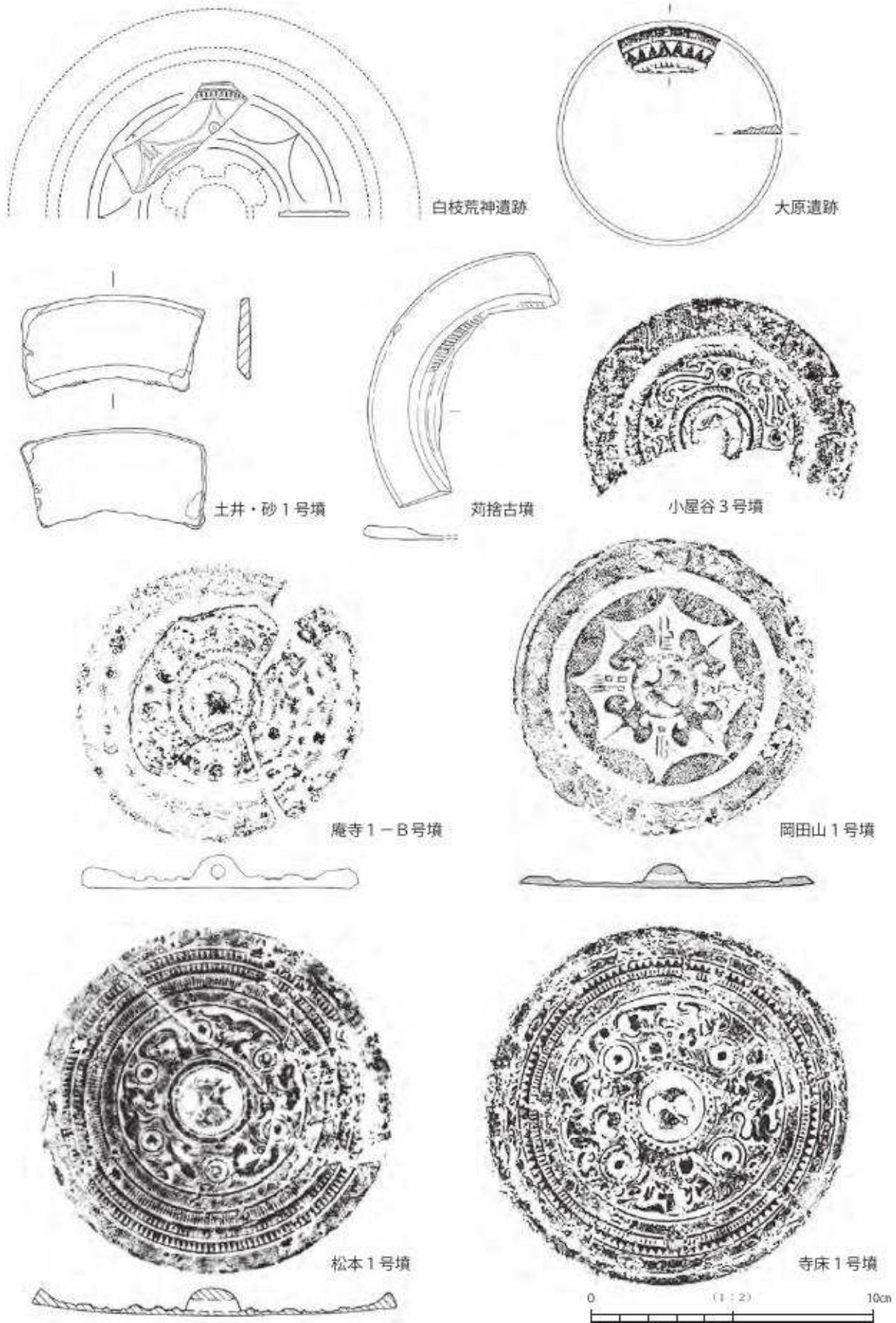
なお、古墳時代まで伝世されて古墳に副葬された漢鏡については、島根県下においても8点の出



第24図 石見地方～伯耆地方西部出土の漢鏡分布図⁽¹⁾

| 所 在 | 遺跡名 | 出土造構等 | 出土造構の時期 | 鏡種 | 状態 | 漢鏡編年 |
|-------|-----------|-------------------|---------|-------------|------------|--------|
| 島根県 | 石見 大田市仁摩町 | 庵寺1-B号墳 | 古墳 | 古墳前期 | 八禽鏡 | 完形鏡 4 |
| | 出雲市白枝町 | 白枝荒神遺跡 | 集落包含層 | 弥生後期中葉～古墳前期 | 内行花文鏡 | 破鏡 5 |
| | 雲南市加茂町 | 土井・砂1号墳 | 古墳 | 古墳前期 | 内行花文鏡 | 破鏡 5 |
| | 雲南市三刀屋町 | 松本1号墳 | 古墳 | 古墳前期 | 上方作系浮彫式獸帶鏡 | 完形鏡 7 |
| | 松江市法吉町 | 月鏡古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 盤龍鏡 | 完形鏡 6? |
| | 松江市東川津町 | 苅捨古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 雲氣禽獸文鏡 | 破鏡 4 |
| | 松江市大草町 | 岡田山1号墳 | 古墳 | 古墳後期 | 内行花文鏡 | 完形鏡 6 |
| | 松江市八雲町 | 小屋谷3号墳 | 古墳 | 古墳前期 | 雲氣禽獸文鏡 | 破鏡 4 |
| | 松江市東出雲町 | 寺床1号墳 | 古墳 | 古墳前期 | 圓像鏡 | 完形鏡 7 |
| | 安来市佐久保町 | 大原遺跡 | 集落包含層 | 弥生中期中葉～奈良 | 鏡種不明 | 破鏡 6~ |
| 鳥取県西部 | 米子市青木 | 青木遺跡 | 竪穴住居 | 弥生後期後葉 | 八禽鏡 | 破鏡 4 |
| | 米子市福市 | 福市遺跡 | 竪穴住居 | 弥生終末 | 鏡種不明 | 破鏡 ? |
| | 米子市石州府 | 石州府29号墳 | 古墳 | 古墳前期 | 上方作系浮彫式獸帶鏡 | 完形鏡 7 |
| | 米子市石州府 | 石州府119号墳 | 古墳 | 古墳前期 | 鏡種不明 | 破鏡 ? |
| | 大山町長田 | 妻木晚田遺跡 (松尾頭地区) | 竪穴住居 | 弥生後期後葉 | 内行花文鏡 | 破鏡 5 |
| | 南部町浅井 | 浅井11号墳 | 古墳 | 古墳前期 | 圓文帶神獸鏡 | 完形鏡 7 |
| | 日南町霞 | 霞17号墳 | 古墳 | 古墳前期 | 内行花文鏡 | 完形鏡 5 |

第1表 石見地方～伯耆地方西部の出土漢鏡一覧表⁽¹⁾



第25図 島根県出土の漢鏡

土例がある。しかしながら、古墳出土の漢鏡についてはどこで伝世し、どのように被葬者の手に渡ったのかを特定することが困難であるため、その分布状況から弥生時代における漢鏡流通の様相を検討することは難しい。島根県下においては、その分布状況についても弥生集落出土漢鏡の様相と大きく異なっている。完形鏡のみならず、土井・砂1号墳、薙捨古墳、小屋谷3号墳に副葬された破鏡についても同様の状況である。破鏡については弥生時代の間に出雲地方へ流入したものがあっても、その後地域内で大きな移動があった可能性を考慮すべきであろう。完形鏡については古墳時代に入手した可能性もあるため、さらに慎重な取り扱いが必要である。

(須賀照隆)

註

- (1) 第1表・第24図については、島根県内及び鳥取県西部出土の前漢鏡・後漢鏡をまとめたものである。従来後漢鏡とされてきた松江市所在の古城山古墳出土鏡については、西晋鏡との見解が示されており(岩本2017)、除外した。
- (2) 第24図より西、山口県までの日本海沿岸地域においては、響灘に面した稗田地蔵堂遺跡(山口県下関市)の弥生中期箱式棺から出土した連弧文銘帶鏡1面が確認されているのみである。

参考文献

- 青木遺跡発掘事業団 1978『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ
- 出雲考古学研究会 1991『松本古墳群一斐伊川流域の前期古墳をめぐってー』古代の出雲を考える7
- 出雲市教育委員会 1998『白枝荒神遺跡』市道松寄下小山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 出雲市教育委員会 2002『白枝荒神遺跡 井原遺跡』白枝地区ふるさと農道整備事業に伴う発掘調査報告書
- 島根県教育委員会 1987『出雲岡田山古墳』
- 島根県教育委員会 1994『白コクリ遺跡・大原遺跡』一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V
- 島根県教育委員会 2001『奥の湯遺跡 登安寺遺跡 湯後遺跡 土井・砂遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12
- 島根県教育委員会 2006『中野清水遺跡(3)・白枝本郷遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 島根県教育委員会 2007『余小路遺跡・小畠遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8
- 島根県教育委員会 2010『梨ノ木坂遺跡 庵寺古墳群 庵寺遺跡II』一般国道9号仁摩温泉津道路予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 島根県教育委員会 2011『薙捨古墳 西川追跡』主要地方道松江島根線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1
- 鳥取県教育文化財団 1985『上福万遺跡 曰下遺跡 石州府第1遺跡 石州府古墳群』中国横断自動車道岡山米子線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 鳥取県教育文化財団調査報告書17
- 鳥取県教育文化財団 2001『霞遺跡群:霞牛ノ遺跡A地区 霞寺ヶ字根遺跡 霞の要害跡 霞17号墳』一般国道183号線改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II 鳥取県教育文化財団調査報告書73
- 東出雲町教育委員会 1983『寺床遺跡調査概報』

- 八雲村教育委員会 1981『御崎谷遺跡 小屋谷古墳群』
- 米子市教育委員会 1986『福市遺跡』鳥取県米子市福市（吉柄地区）発掘調査報告書
- 岩本崇 2017「西晋鏡と古墳時代前期の曆年代－島根県古城山古墳の鏡と土器をめぐって－」『島根考古学会誌』第34集
島根考古学会 63～78頁
- 岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集 国立歴史民俗博物館 39～82頁
- 岡村秀典 1999『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館
- 君嶋俊行 2006「妻木晩田遺跡の破鏡について」「妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2005」鳥取県教育委員会 60～65頁
- 君嶋俊行 2012「青谷上寺地遺跡の鏡」「海を渡った鏡と鉄～青谷上寺地遺跡の交流を探る～」鳥取県埋蔵文化財センター
5～18頁
- 久保穂二郎 2010「浅井11号墳出土銅鏡について」『調査研究紀要』3 鳥取県埋蔵文化財センター 39～50頁
- 高橋周 2011「弥生時代の出雲平野における水域復元」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第1集 出雲弥生の森博物館 1～
13頁
- 米子市史編さん協議会 1999『新修米子市史』第7巻 資料編原始・古代・中世 米子市

第4節 破鏡からみた白枝荒神遺跡

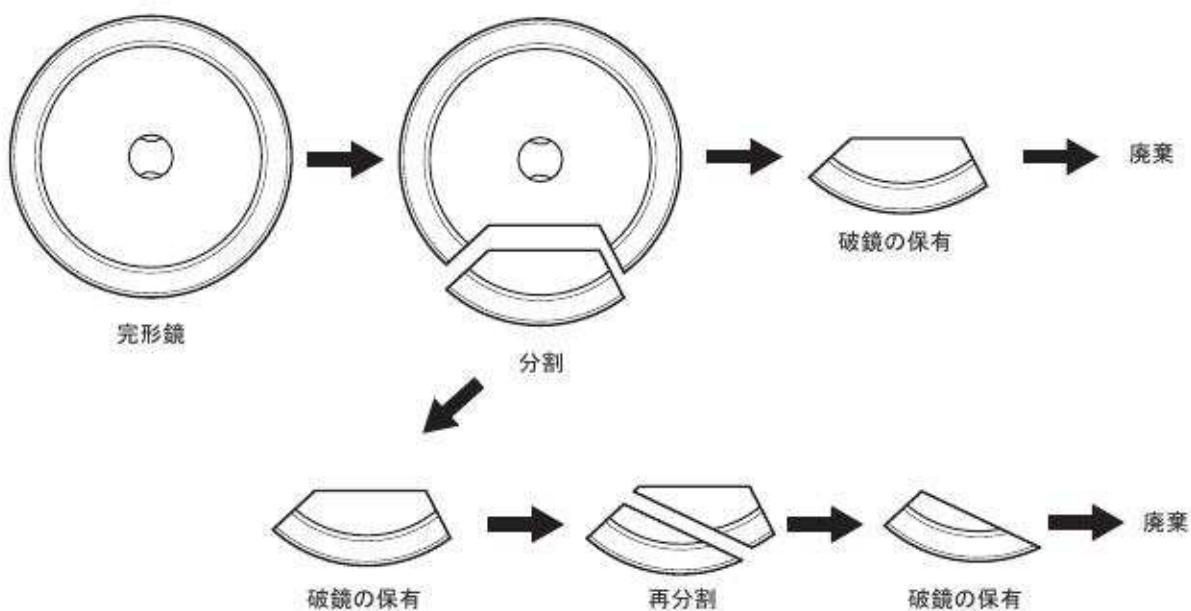
1 破鏡が示す弥生時代の地域間関係

破鏡とは銅鏡の破片を再利用したものである。破鏡には破断面が磨滅しているものや、穿孔が施されているものなどがみられ、破片の状態で保有・使用されたと考えられている。ここでは破片となって拡散したものを破鏡として扱う(南2010)。弥生時代の北部九州で権威の象徴とされた完形鏡の破片という点から、破鏡拡散の背景には単なる物資の拡散という意味以上のことがあったと考えられている(高倉1976・1981、高橋1979・1992、藤丸1993)。

北部九州ではすでに弥生時代中期末の段階において、大陸から入手された前漢鏡の破片を周辺地域や遠隔地へと拡散させることができていた(南2008・2010)。前漢鏡の破鏡が出土した遺跡には各地域における拠点的な性格を有するところが多い。このことから、破鏡の授受には糸島平野や福岡平野などの北部九州の中核といえる地域との関係性を示すものであったことも考えられる。その後に日本列島にもたらされた後漢鏡は、破鏡としての利用が急速に拡大する。破鏡を保有する地域は格段に増え、複数面の破鏡を保有する集落も出現する。破鏡のバリエーションも各段に増え、なかには穿孔が施され懸垂鏡として利用されるものもみられるようになる。白枝荒神遺跡で出土した破鏡はこのような破鏡利用の拡大期のものである。

ここでは白枝荒神遺跡出土破鏡を評価するにあたって、中四国地域における破鏡の授受関係や扱われ方について検討する。

検討にあたっては特に破鏡の破断面の状態に注目したい。破鏡の分割から廃棄までのプロセスは複

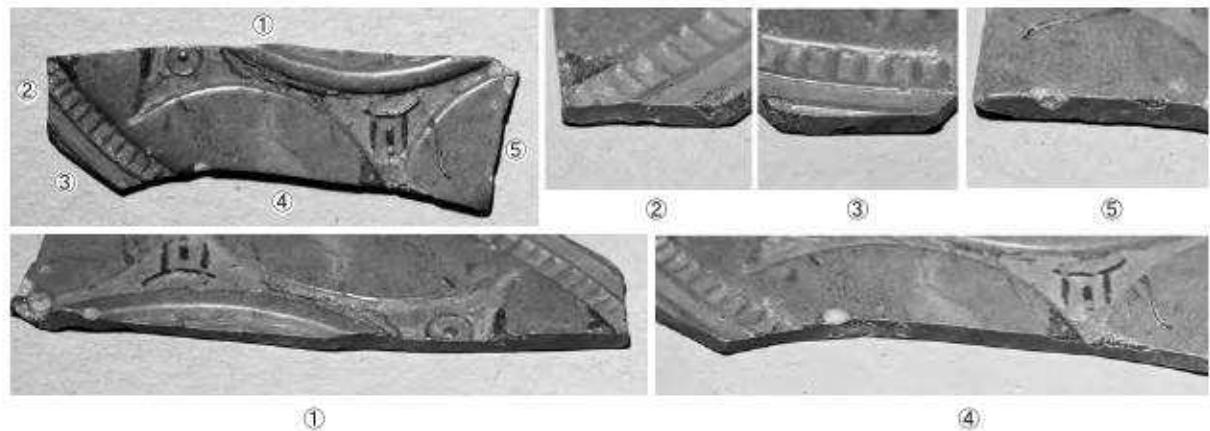


第26図 破鏡の分割から廃棄に至るプロセス

雜で、分割・入手後に保有されて廃棄される場合や、分割・入手・保有後に再分割される場合などがある（第26図）。このような履歴の相違は破断面の状態にあらわれる。破断面に磨滅がほとんどみられない場合は入手後短期間のうちに廃棄されたと判断される。また、すべての破断面が一様に大きく磨滅を被っている場合は、入手後に長期間保有された後に廃棄されたと考えることができる。一方、再分割された破鏡は、保有期間中に磨滅した破断面と、再分割によって新たに形成される破断面（未磨滅）が一個体の中にみられることになる。さらに再分割が複数回に及んだ場合は、破断面の磨滅状況に数段階の差異が生じることとなる。このような破鏡の破断面の状態を周辺地域と比較することで破鏡からみた白枝荒神遺跡の歴史的な位置付けについて考えていく。

2 白枝荒神遺跡の破鏡

鏡式や型式はすでに第3節で述べられているように、岡村秀典氏による後漢鏡分類（岡村1993）の四葉座内行花文鏡Ⅲ式、もしくはⅣ式であり、1世紀後半以降に製作されたものである。穿孔は施されていない。注目されるのは破断面の状態で、全周が同じような状態で、ほとんど磨滅を被っていない（第27図）。この場合は破鏡が生成されてから廃棄されるまでの期間が短く、再分割などはおこなわれていなかった可能性が高いことを示している。



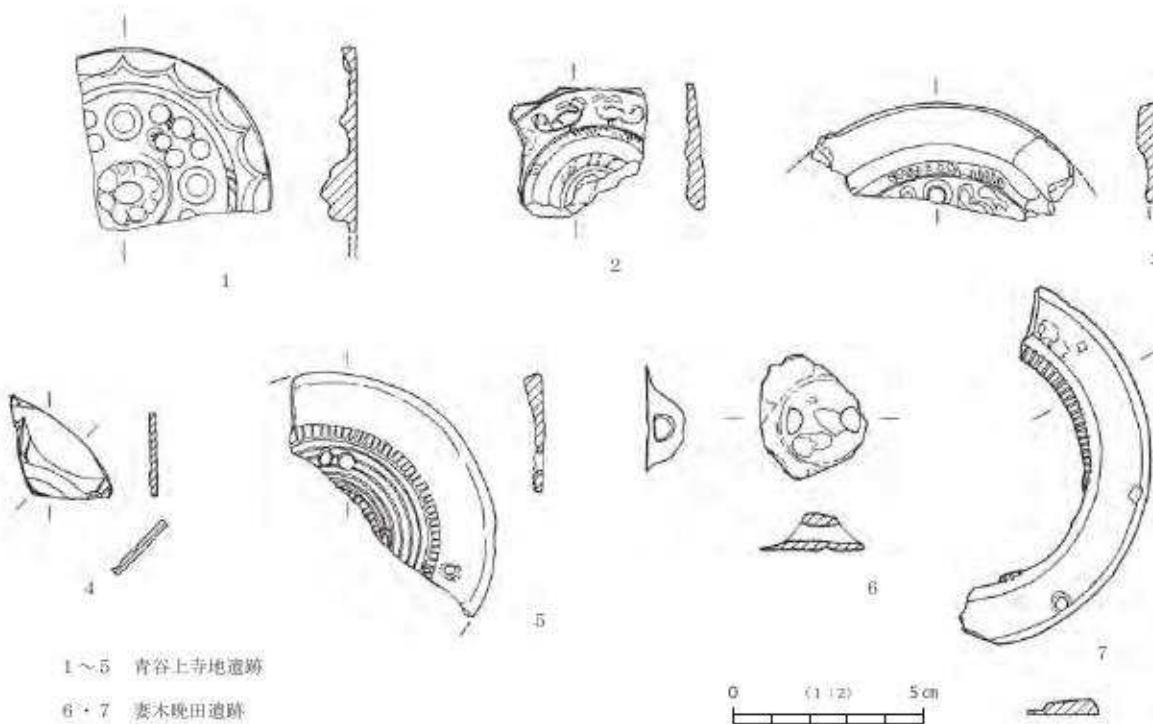
第27図 白枝荒神遺跡出土破鏡の破断面

3 中四国地域の破鏡

（1）山陰地域

山陰では破鏡の出土に地域的なまとまりがみられる。鳥取県域では米子平野～大山町妻木晚田遺跡、東郷湖周辺～鳥取市青谷上寺地遺跡、鳥取平野の3地域で破鏡が出土している（君嶋2013）。特徴としては青谷上寺地遺跡（第28図1～5）や妻木晚田遺跡（第28図6・7）などのように、1遺跡で複数面出土する傾向がみられる点を指摘できる。青谷上寺地遺跡では前漢末から後漢前半にかけての破鏡が出土している点も特筆される（君嶋2012）。これに対して、島根県地域では破鏡が非常に少ない。このような偏在性の背景には銅鏡に対する意識の差が存在したことが指摘されている（岡村2012）。

鳥取県地域で複数面が出土した遺跡の破鏡をみると、青谷上寺地遺跡や鳥取市秋里遺跡では、



第28図 鳥取県地域出土破鏡の諸例

1面の破鏡の破断面に磨滅面と未磨滅面の両者がみられるものが出土しており、当地域において再分割がなされたことも考えられる。このような傾向は北部九州の周辺地域である熊本県地域と同様な状況であり、北部九州的な破鏡の拡散形態の影響によるものと思われる。

一方で、島根県地域では白枝荒神遺跡の他で弥生時代に属する可能性のあるものは、島根県安来市大原遺跡出土破鏡のみである。大原遺跡出土破鏡は小破片であり内区文様をほとんど欠いているが、縁の文様構成からは岡村編年漢鏡6期以降ということが明確で、後漢後期以降にもみられるものである。報告書では破断面が研磨されているとあり（島根県教育委員会ほか 1994），白枝荒神遺跡出土鏡とは様相が異なる。白枝荒神遺跡とは距離的に離れており、より新しい時期に拡散したものである可能性もあり、拡散における両者の関係性は薄いと考えられる。白枝荒神遺跡出土破鏡は破断面の磨滅がほとんどなく、現状では出雲地域で唯一の弥生時代の破鏡出土遺跡であることから、ここから周辺へと拡散するといった状況はほとんどなかったと考えられるだろう。再分割による拡散という方式が採られていない点は、鳥取県地域とは対照的である。

(2) 山陽地域

山陽地域では破鏡の出土は多くない。山口県山口市で複数の破鏡が出土しているが、それ以東では地域的な偏在性を欠いている。山陰地域と異なるのは大規模な拠点的集落でも破鏡のまとまりがみられない点である。例えば岡山県南平野部で最も弥生時代の遺構密度が高い岡山県岡山市足守川加茂A・B遺跡や同津寺遺跡では、漢代の鏡の破鏡は出土していない。本地域で破鏡が出土しているのはこれらの遺跡群から北西に約6km離れた岡山県総社市刑部遺跡である（第29図、岡山県古代吉備文化財センター編 2014）。出土数が限られており、北部九州的な保有と分割を繰り返しながら広がる方式が採ら

れていないという様相は出雲地域と共に通している。また後漢末～三国時代前半期に製作された飛禽鏡と考えられる破鏡が、刑部遺跡とは距離的に離れている岡山県赤磐市桜山2号墓で出土している。破断面は磨滅している面と磨滅していない面があり、さらに穿孔が施されて懸垂鏡として用いられている。このような破断面の状況からは複数回の分割と磨滅が生じていたことを示している。出雲地域と吉備地域ではこのような破鏡利用の展開過程にも共通性がみられる。

(3) 四国地域

四国では瀬戸内海側、太平洋側の両方で破鏡が出土しており、松山平野と高知平野にまとまりがみられ（君嶋 2012），近年は香川県善通寺市周辺において確認例が増加している。瀬戸内海側では香川県善通寺市旧練兵場遺跡で6面（第30図）、香川県善通寺市稻木遺跡・愛媛県松山市文京遺跡・同大相院遺跡で2面、太平洋側では高知県高知市西分増井遺跡・同南国市田村遺跡で3面、徳島県徳島市庄・藏本遺跡で2面の破鏡が出土している。

一遺跡で複数面出土する場合が各地でみられるのが四国地域の特徴である。拠点的集落である旧練兵場遺跡では擦り切り状の痕跡が残存する破鏡が出土しており（第30図3），この破鏡は破断面に磨滅面と非磨滅面が確認される。擦り切り状の痕跡を再分割途中のものであると判断すると、破片の状態での保有・再分割がなされ、さらに本遺跡での再分割という状況が復元される。このことから旧練兵場遺跡で破鏡が受容され、本地域内での新たな授受関係が成立していたことが考えられる。香川県善通寺市では旧練兵場遺跡の周辺からも破鏡が出土していることから、破鏡の拡散が旧練兵場遺跡を経由したものであったと考えられる（信里 2013）。北部九州の影響を受けた拡散形態であったと言えるだろう。

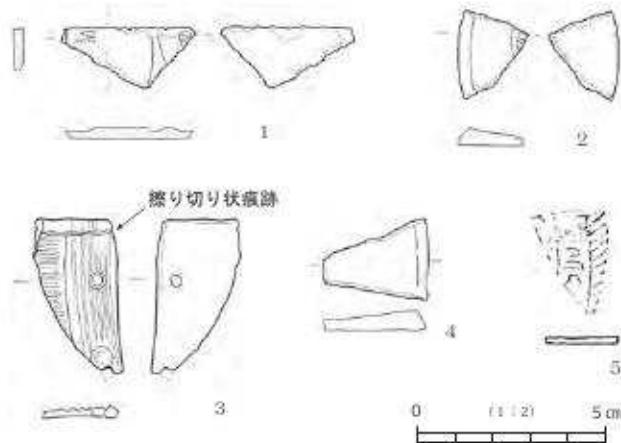
4 白枝荒神遺跡の歴史的位置

ここまで検討により、白枝荒神遺跡の破鏡の扱われ方は山陰東部や四国地域とは異なっており、吉備地域との共通性を見出すことができる点が確認された。弥生時代後期後半における出雲地域と吉備地域は、両地域の王墓である島根県出雲市西谷墳墓群と岡山県倉敷市橋築墓に共通した墳墓祭祀様式が認められることからも（南 2017など），非常に密接な関係を有していたことが知られている。また過去の調査では白枝荒神遺跡で吉備地域の土器が出土しており（米田 1997），出雲地域の他遺跡で



岡山県古代吉備文化財センター蔵

第29図 吉備地域出土破鏡（刑部遺跡）



第30図 四国地域出土破鏡（旧練兵場遺跡）

多くの吉備系土器の搬入品・模倣品も認められる（池淵 2007）。さらに吉備系土器の出雲への波及は階層制をもって搬入、使用されたことも指摘されている（宇垣 2003・池淵 2007）。周辺地域とは異なり、出雲・吉備の両地域において破鏡の扱い方や拡散形態に北部九州の影響が顕著ではないということは、破鏡受容後の地域内での価値観に共通した理解があったことも考えられる。またこのような出雲地域と吉備地域の関係性は弥生時代後期後葉の短期間であったとされていることから（坂本 2013）、破鏡の入手から廃棄もこの期間におけるものであった可能性が高い。

白枝荒神遺跡の立地は、旧地形の復元から出雲の海の玄関口であったと考えられている。海上交易に関わった集落であると考えられ、破鏡の出土は北部九州から流入する文物の窓口であったことを物語っている。しかしそこにおける破鏡の扱いは吉備地域と共通しており、出雲地域と吉備地域に共通した規範があったことも想定される。

以上のことから破鏡の出土は、白枝荒神遺跡が広域交易の場であり、吉備地域との関係性の深さを如実に示す集落であったことを示している。

（南健太郎）

参考文献

- 池淵俊一 2007 「弥生時代後期の遺構・遺物に関する諸問題」『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区』 Vol.2 島根県教育委員会 189～213 頁
- 宇垣匡雅 2003 「特殊器台研究の諸問題」「邪馬台国時代の出雲と大和」 香芝市教育委員会 91～108 頁
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」「国立歴史民俗博物館研究紀要」第 55 集 国立歴史民俗博物館 39～82 頁
- 岡村秀典 2012 「鏡からみた漢と倭の交流」「海を渡った鏡と鉄～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～」 島取県埋蔵文化財センター 51～58 頁
- 岡山県古代吉備文化財センター編 2014 『所報吉備』 57 岡山県古代吉備文化財センター
- 君嶋俊行 2012 「青谷上寺地遺跡の鏡」「海を渡った鏡と鉄～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～」 島取県埋蔵文化財センター 5～18 頁
- 君嶋俊行 2013 「山陰地方における弥生時代青銅鏡の動向」「弥生時代後期青銅鏡を巡る諸問題」 九州考古学会 80～85 頁
- 坂本豊治 2013 「山陰における弥生後期の墓制」『考古学研究会例会シンポジウム記録』9 考古学研究会 217～240 頁
- 島根県教育委員会他 1994 『白ゴクリ遺跡・大原遺跡』
- 高倉洋彰 1976 「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2 九州歴史資料館 1～23 頁
- 高倉洋彰 1981 「鏡」『三世紀の考古学』中巻 学成社 213～240 頁
- 高橋徹 1979 「廃棄された鏡片—豊後に於ける弥生時代の終焉—」『古文化談叢』第 6 集 九州古文化研究会 63～88 頁
- 高橋徹 1992 「鏡」『菅生台地と周辺の遺跡』XV 竹田市教育委員会 327～351 頁
- 信里芳紀 2013 「青銅器」『旧練兵場遺跡Ⅲ』第三分冊 香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構普通寺病院 145～151 頁
- 藤丸詔八郎 1993 「破鏡の出現に関する一考察—北部九州を中心として—」『古文化談叢』第 30 集（上）九州古文化研究会 87～115 頁
- 南健太郎 2008 「前漢鏡の破鏡とその拡散形態—破鏡に施される二次加工の検討から—」『王權と武器と信仰』 同成社 27～

37 頁

南健太郎 2010 「破鏡拡散開始期の再検討」『先史学・考古学論究』V 龍田考古会 363～382 頁

南健太郎 2017 「埋葬儀礼の変容過程からみた楯築墓変容過程からみた楯築墓」『考古学研究会シンポジウム記録集』11 考

古学研究会 55～70 頁

米田美江子 1997 「平成5年度調査 一考察」『白枝荒神遺跡』 出雲市教育委員会 191～201 頁

第5章 結語

白枝荒神遺跡は、弥生時代中期から古墳時代前期を中心とした時期の集落跡として知られてきた遺跡である。今回の調査によって、①小畠遺跡と連続した東西200m以上、南北400m以上の集落遺跡であること、②集落の開始が弥生時代前期後葉まで遡ること、③弥生時代後期において、漢鏡・ガラス製品といった舶載品が出土すること、などが新たに明らかとなった。

他地域との交流地点としての性格については、過去の調査においても北部九州系土器、西部瀬戸内系土器、吉備の特殊土器、分銅型土製品等が出土しており、すでに指摘されてきたことである。今回の調査における舶載品の出土によって、海を介した交易の場としての性格がより鮮明になったと言えよう。

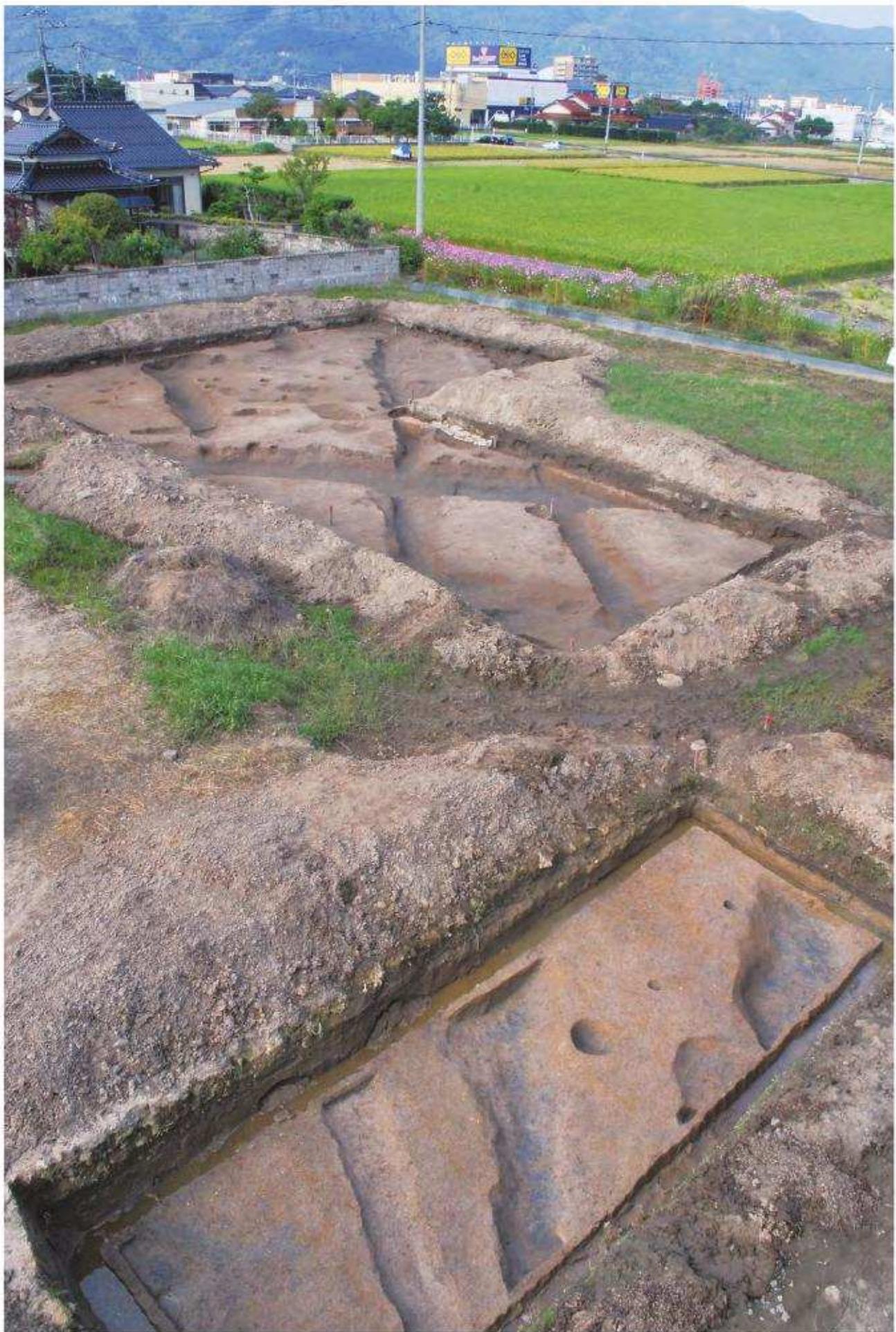
特に、漢鏡の出土については出雲平野で初めてであり、弥生時代の集落から出土した確実な例としては島根県内でも初めての発見である。破鏡としての漢鏡の扱われ方においては、吉備地域との共通性も明らかとなった（第4章第4節）。白枝荒神遺跡が海上交易における拠点であったことを示すとともに、出雲地域と吉備地域との関係性の深さを示す貴重な成果である。

以上のことから、白枝荒神遺跡が出雲平野の弥生時代集落群の中でも重要なムラの一つであったことは疑いない。

しかしながら、白枝荒神遺跡における集落の全体像については未だ不明な点が多い。過去の調査も含め、これまでに確認されている遺構は溝・土坑・不規則なピットにほぼ限られており、明確な建物跡等は確認されていない。これらの遺構は、集落縁辺部に位置する区画溝や水路、土坑墓等と推定され、人々の居住域は他のエリアに存在したものと考えられる。過去の調査区の様相から、今回の調査地東方の水田エリアが弥生時代における微高地最高所にあたると思われ、居住域の有力候補地であるが、推測の域を出ない。将来的な調査に期待したい。

（須賀照隆）

写真図版



調査区全景（南より）



120

破 鏡



39



122



121



123

ガラス小玉



調査区北区（北西より）



調査区南区（東北東より）

図版4



SD 1・2・5 (北区南・北より)



SD 1・2 (北区北・北より)



SD 5 (北区・西北西より)



SD 9 (南区・西北西より)



SD 6 (北区・北より)



SD 6 最下層遺物出土状況 (北区・北より)



SD 6 (右)・SK 3 (左) 土層 (北区・北より)

図版 6



SK 5 (北区・北より)



SK 2 (北区・北より)

SK 2 ガラス小玉出土状況 (北区・北より)



SD 4 (北区・東より)



SD 7・8 (北区・北西より)



SK 1 (北区・北より)



SK 4 (北区・北より)



SK 6 (北区・東より)



SK 7 (北区・東より)



SK 8 (南区・北西より)



SK 9 (南区・北東より)



48



49



50



51



52



55



53



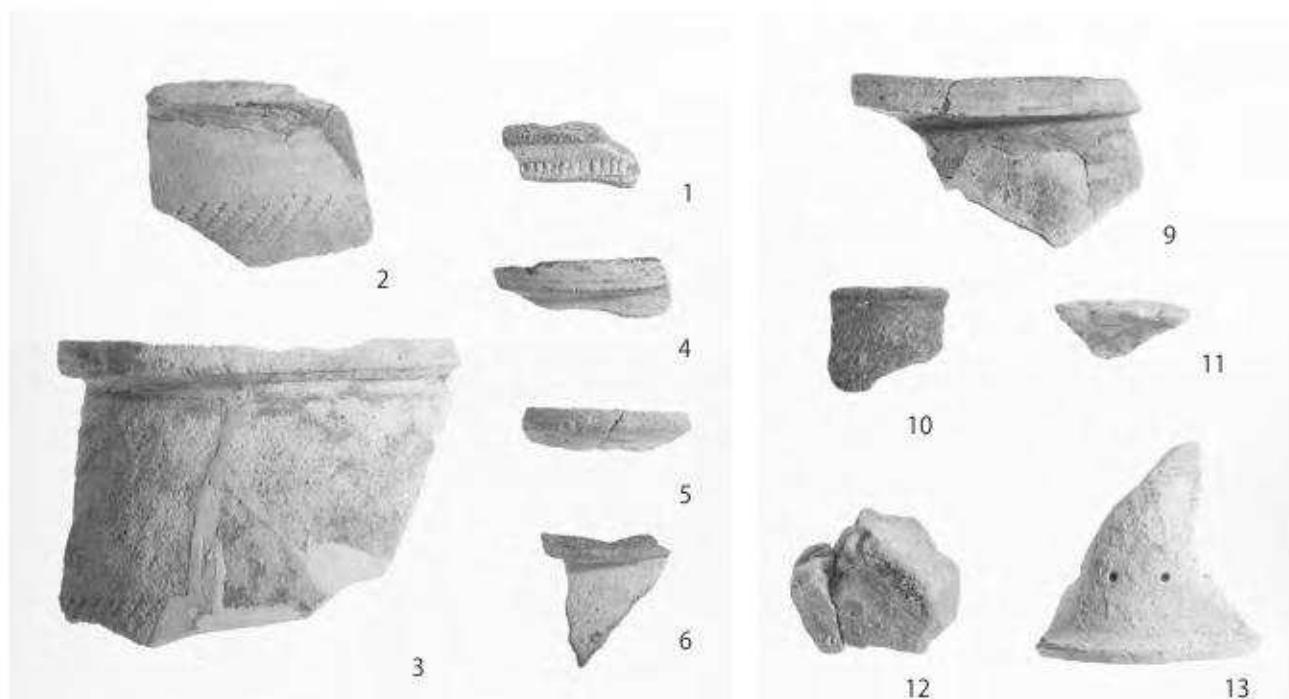
54



56

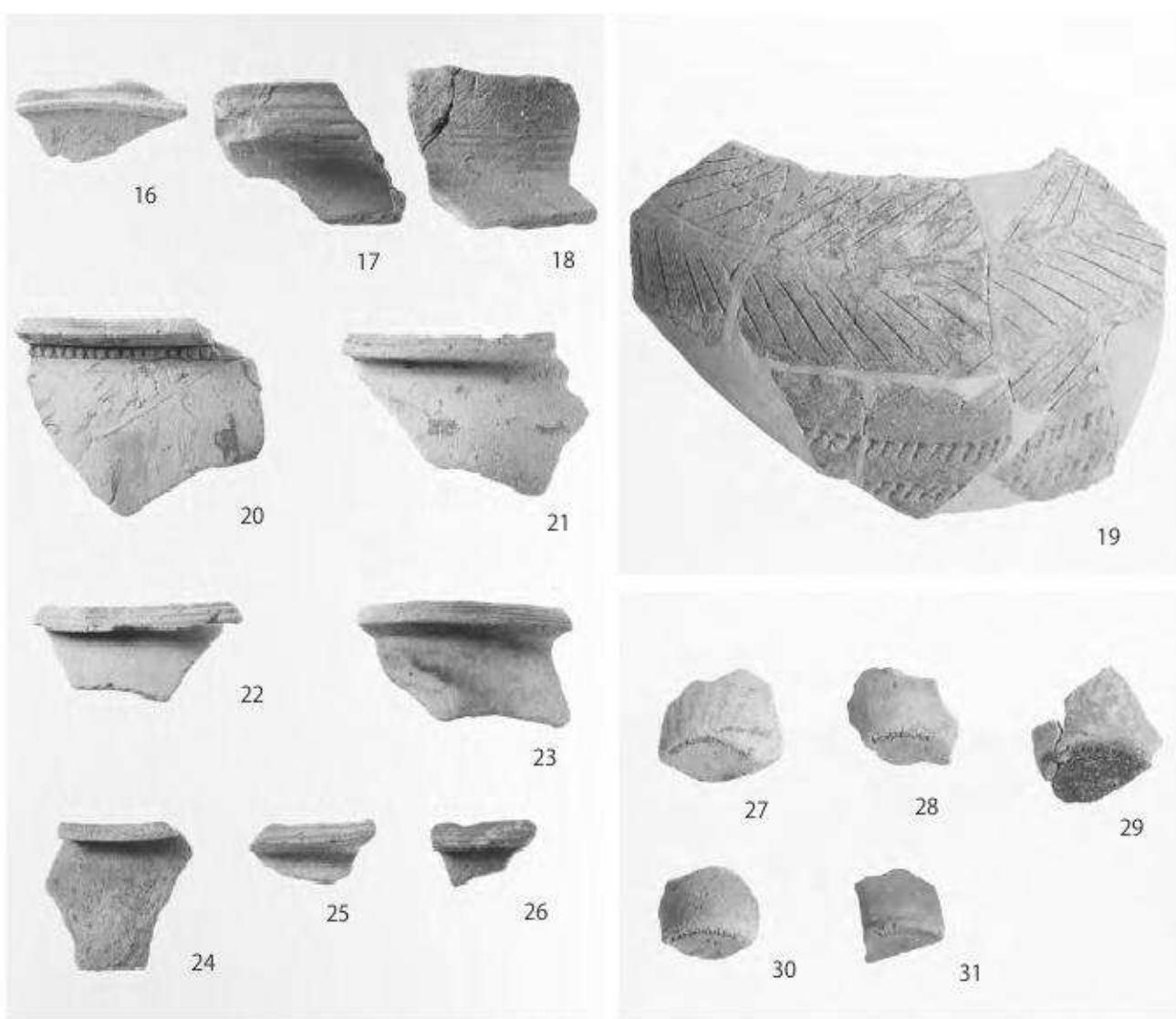


57

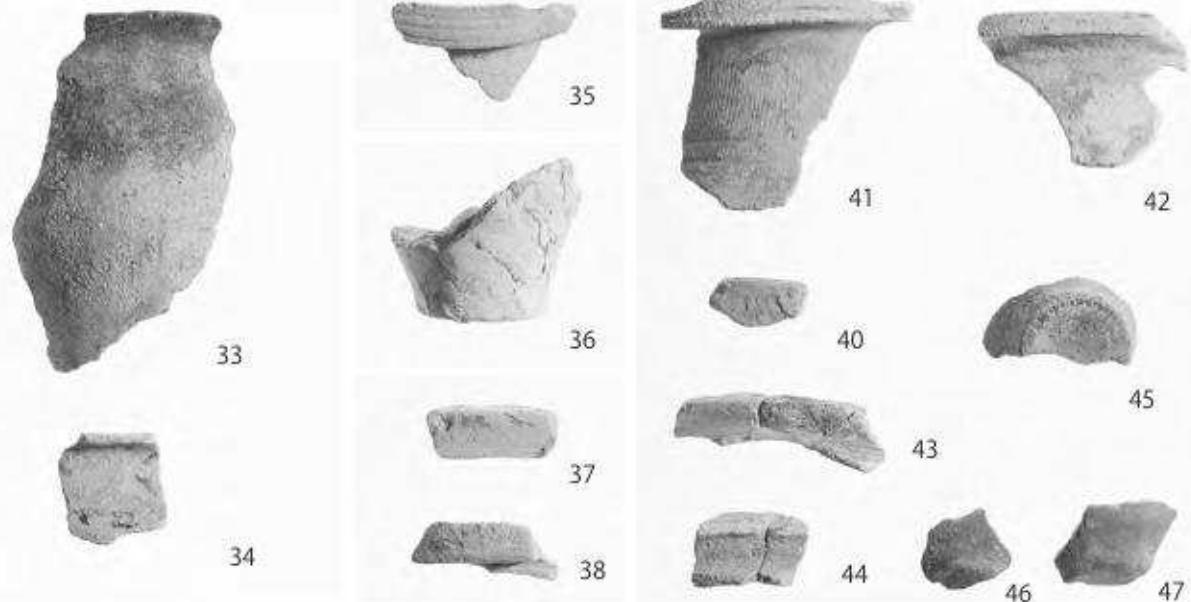


SD 1 出土土器

SD 2 出土土器



SD 5 出土土器



SD 6・9, SK 1・2・4 出土土器



77

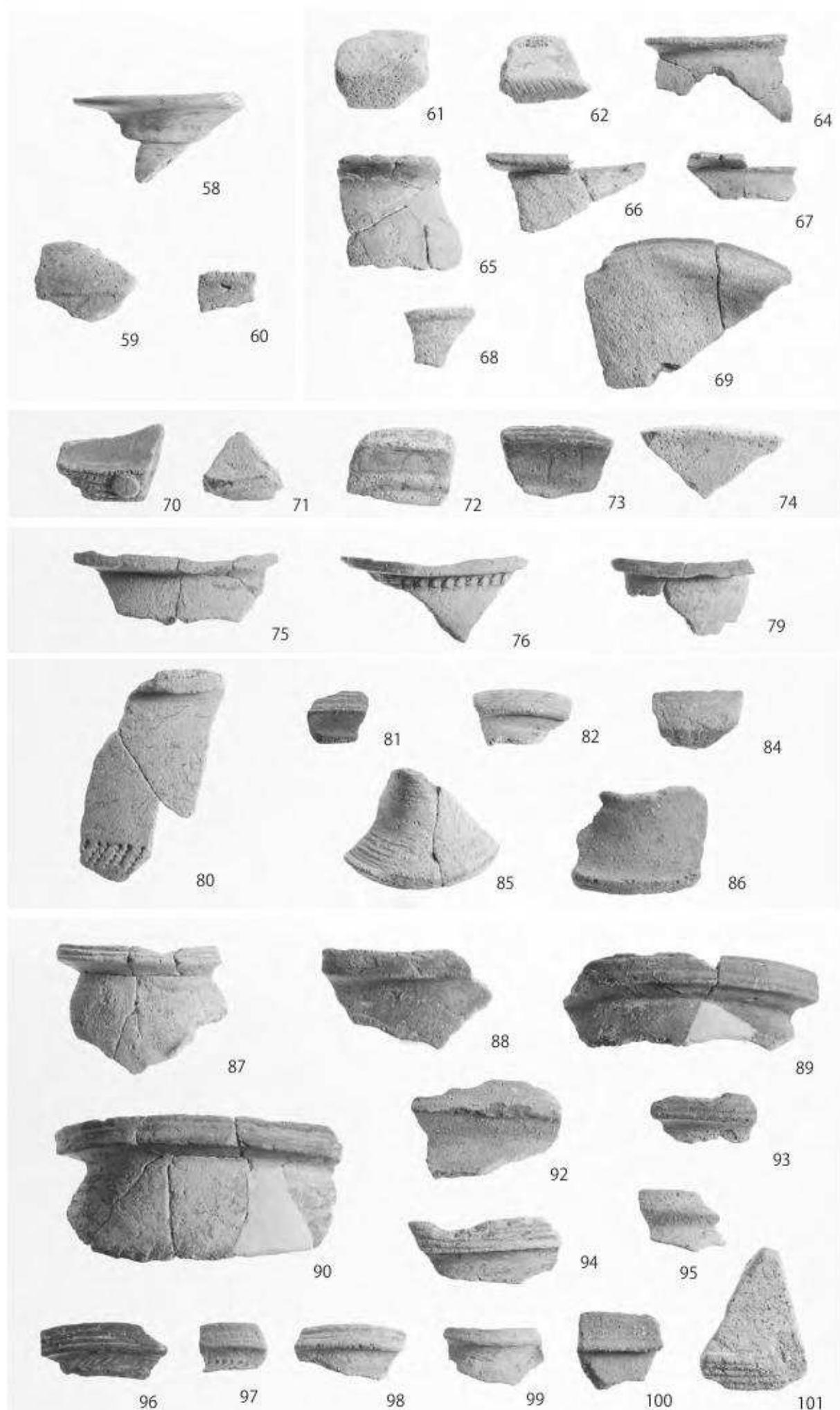


91

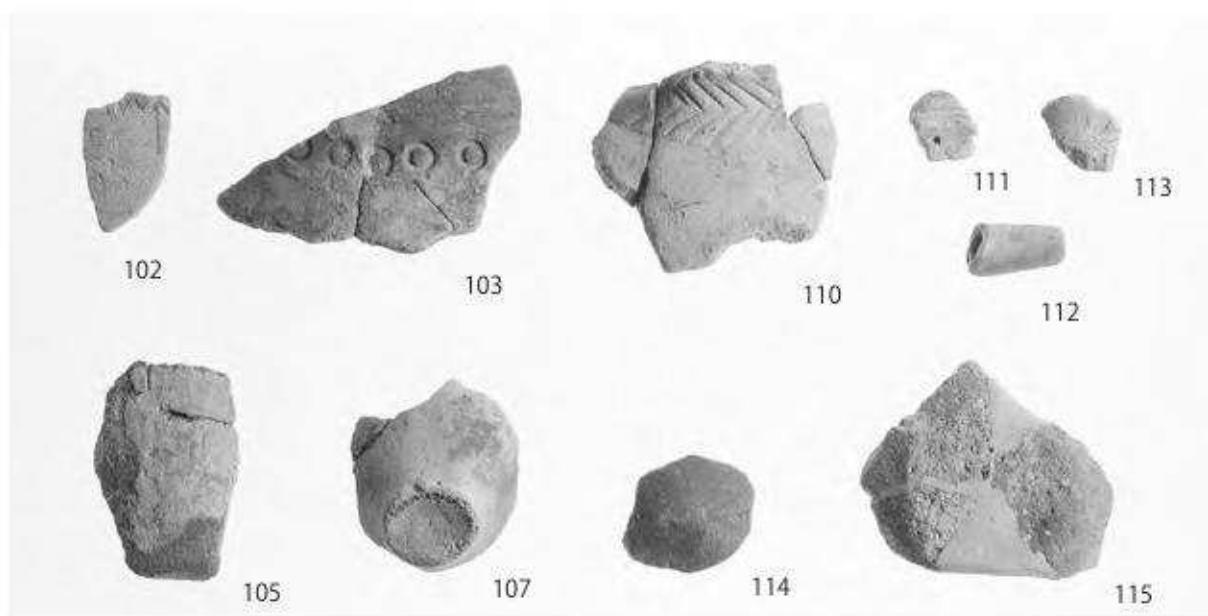
遺構外出土土器 1



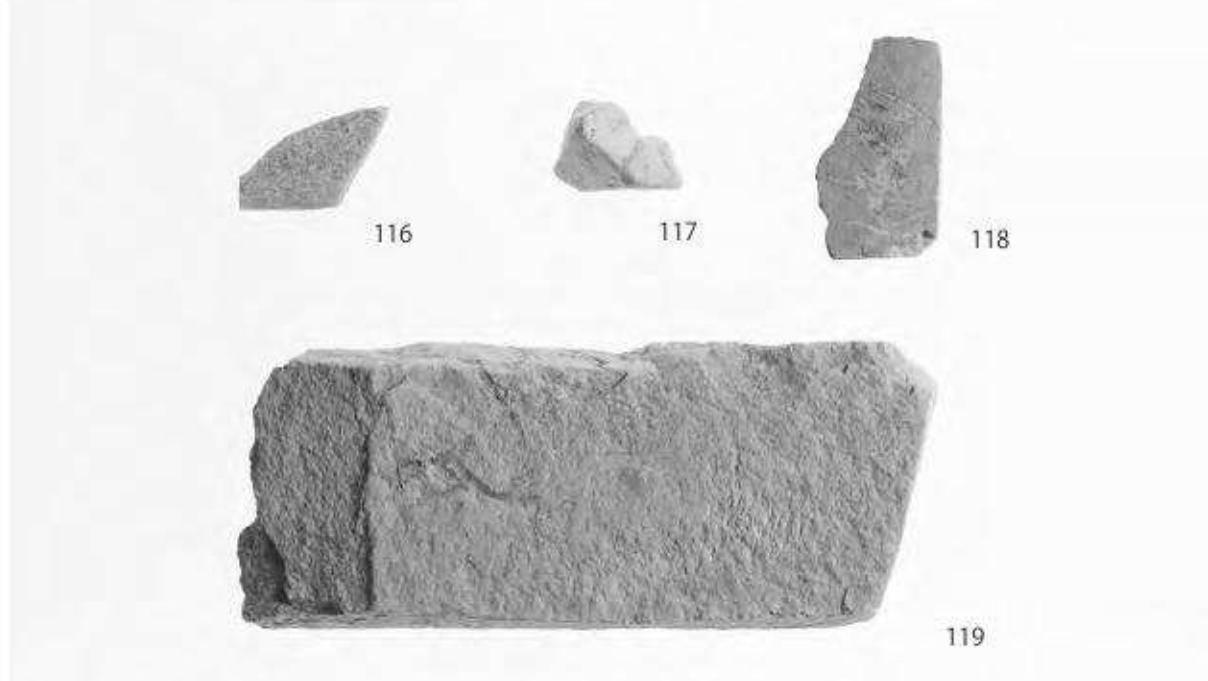
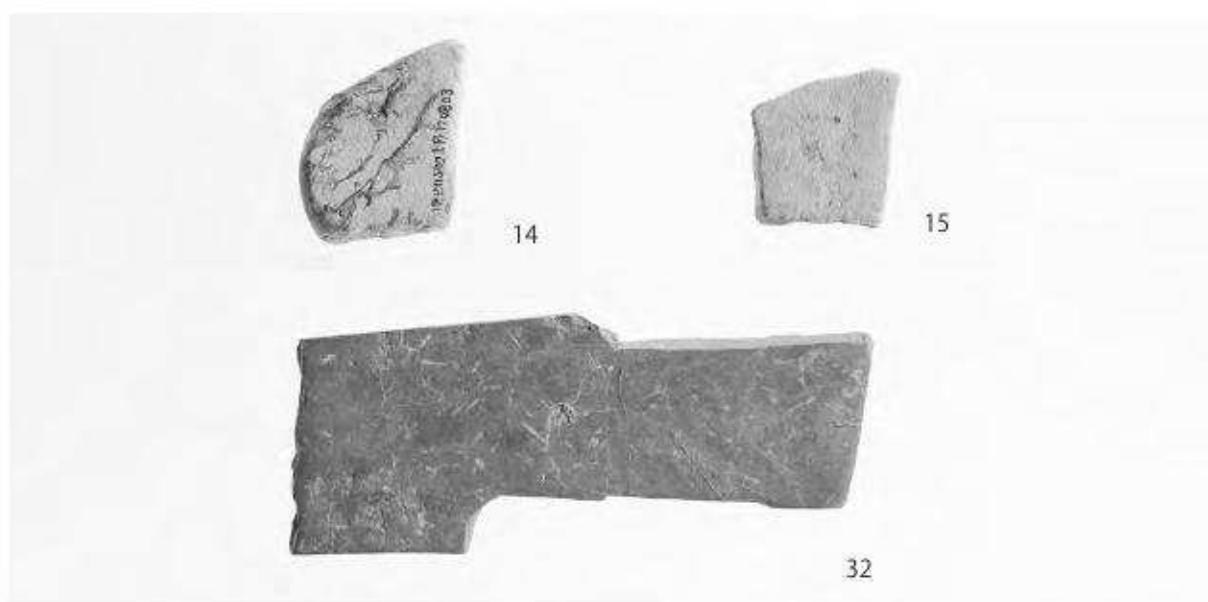
遺構外出土土器 2



遺構外出土土器 3



遺構外出土土器 4



石製品



SK 5 出土割石

報告書抄録

| ふりがな | しろえだこうじんいせき | | | | | |
|-----------------------|--|-------|------------------|--------------------------------|---------------------------|--|
| 書名 | 白枝荒神遺跡 | | | | | |
| 副書名 | 商業用店舗新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | |
| シリーズ名 | 出雲市の文化財報告 38 | | | | | |
| 編著者名 | 須賀照隆（編） 南健太郎 | | | | | |
| 編集機関 | 出雲市 市民文化部 文化財課 | | | | | |
| 所在地 | 〒 693-0011 島根県出雲市大津町 2760 TEL (0853) 21-6618 | | | | | |
| 発行年月日 | 2018（平成 30）年 12 月 | | | | | |
| ふりがな | コード | | 北 緯 | 東 経 | 発掘期間 | 発掘面積 |
| 所収遺跡遺名 | 所在地 | 市町村 | | | | |
| しろえだこうじんいせき 白枝荒神遺跡 | 島根県出雲市 白枝町 962 ほか | 32203 | W 109 (局管轄地図) | 35° 22' 07" 132° 44' 04" | 20170719 ～ 20170926 | 約 335m ² 発掘要因 商業用店舗新築 |
| 遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 |
| 白枝荒神遺跡 | 集落遺跡 | 弥生時代 | 溝 土坑 ピット | 内行花文鏡 (破鏡) ガラス小玉 弥生土器 | 出雲平野で 初となる 漢鏡出土 | |
| 要約 | <p>白枝荒神遺跡は、出雲平野の中央部、島根県出雲市白枝町・天神町・渡橋町にまたがる弥生時代を中心とした集落遺跡である。</p> <p>今回の発掘調査では、弥生集落に伴う溝や土坑墓などを確認したほか、出土遺物中に内行花文鏡の破鏡、ガラス小玉といった舶載資料を確認することができた。</p> <p>特に破鏡については、近隣地域に出土例がほとんどなかった弥生集落出土の漢鏡として貴重な発見となった。</p> <p>また、集落の開始時期が弥生時代前期までさかのぼること、遺跡の範囲が従来想定されていた範囲より大幅に広がることが確認されたことも大きな成果と言える。</p> | | | | | |

2018年12月25日 発行

出雲市の文化財報告 38
商業用店舗新築工事に伴う発掘調査報告書
白枝荒神遺跡

編 集 出雲市市民文化部 文化財課
島根県出雲市大津町 2760

発 行 出雲市教育委員会
島根県出雲市今市町 70

印 刷 有限会社 西村印刷

